
very lucky angel (R15ver.)

窪田拓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

very lucky angel (R15ver.)

【Nコード】

N3655H

【作者名】

窪田拓

【あらすじ】

御堂遥人は、母が亡き後屋敷に閉じ込められた。学園以外は外と隔絶され、彼の世界は兄の将人と和人だけ。だが、十二歳になった遥人を兄達は外の世界へと連れ出した――。

プロローグ

ざわざわ　ざわざわ　ざわざわ

風に弄られる葉擦れの音が窓の外を揺らしていた。

高い天井の下、広い子ども部屋の大きなベッドの中で、幼い彼は一人荒く息を継ぐ。

常からの白い肌は一層白みを帯びているが、頬だけは火を灯したように朱に染まっている。

蜂蜜色のくせ毛は汗で額に張り付き、虚ろに細められた青碧色の瞳は高熱で潤んでいる。

「まーま…」

細い声を聞く者はいない。

夜半となり、乳母もメイドも下がってしまった後での発熱だった。

「まー…」

ゆっくりと身を起こすと、空気を含み見た目より重さの少ない掛け布が音もなくベッドから落ちる。

彼の重さでは、ベッドは軋みもしない。

裸足のままふらふらと扉へと向かうその小さな手は開かれて、何かを求めるように前へと差し出されていた。

虚ろな瞳がドアノブを見つけ出し手を伸ばした時、それが少しだけ先に動いた。音を立てずに扉が開く。

その事に気付かず足を動かす彼を、抱き留めた手があった。

「：やっぱり」

呆れたような声で彼を抱き上げたのは黒髪の少年だった。

骨太な父に似た彼は十二歳でありながら、その長躯と精悍な顔立ちで年齢不相応な雰囲気を持っている。

相対した大人を戸惑わせる強い瞳を和らげて、彼――御堂将人は抱き上げた弟の熱い頬に触れた。

「兄さん？」

後ろから声が掛かり将人が振り返ると、間接照明だけとなった広い廊下にもう一人少年が立っていた。

「お前も来たのか、和人」

頷いて将人の腕の中を覗き込むのは、栗色の髪の少年。

二歳年上の兄とは対照的な柔和な空気を持つ彼は、背は高いが線が細く中性的にすら見える。

彼もまた、十歳とは思えない大人びた顔をしている。

「熱、高そうだね」

二人ともパジャマ姿で声を潜めている。

とは云え、廊下の灯りを殆ど落とされた時間となってはその声が届く範囲に人はいない。そこは広い屋敷の中、三人の兄弟の部屋だけが並んだ一角だった。

長兄に抱かれた幼い末弟は遙人。長男である将人とは十歳の年の差がある。

蜂蜜色の髪や日本人離れした顔のつくり、そして青碧色の瞳はイギリス人の母から受継いだものだった。

「母さんも今日は調子悪そうだったからな」

「やっぱり同調しちゃうんだねえ」

柔らかいくせ毛を撫でる和人の言葉を受けて、将人は頷くと小さな手を握る。

熱く汗ばんだそれは、兄の親指をぎゅっと握った。

昔から体が弱かった母メアリーは遥人を産んでから床に臥す事が多くなった。

彼女が調子を崩すと何故か遥人も具合が悪くなる事が多い。

感受性が強いのか偶然か、母と同じようなタイミングで発熱する原因は主治医にも分からないという。

今夜もそれが心配で来てみれば、やはり発熱している。

「にーに、まーま…」

「母さんの部屋に行きたかったのか？」

苦しそうに呟く遥人の顔を覗きこむと将人は、既に声変わりを終えた声で聞く。

「まーま…」

愚図るでもなく繰り返す遥人は、兄の胸に体を預けながら何度も母を呼ぶ。

呼んだところで自らもベッドに縛られている母は来る事はない。

将人はしょうがない、と小さく息をついた。

「母さんの部屋に行って来る。その間に薬と氷枕を用意してくれ」
「分かった。遥人は任せるね」

二人の少年は薄明かりの中、別々の方向に歩き出した。

「将人…?」

小さくノックして入って来た息子にメアリーは微笑んだ。
昼間から体がだるかったが、夕方には熱が高くなり夕食すら一緒に取れなかった。

微睡みながら、また心配させてしまっているだろうと悔やんでいたのだ。

「ごめんね、母さん。少しだけいいかな」

将人の声は限りなく小さい。

母の枕元に寄せた椅子に座ったまま目を閉じる父を起こさないように。
うに。

「遥人？」

「熱を出しているんだけど、母さんに会い来ようとしていたから」

熱い体は母に抱かれ、嬉しそうにしがみ付く。

メアリーは愛しげに髪を濡らす汗を、手元のタオルで押さえるように拭いた。

満足気に目を閉じた遥人はそのまま母の胸に顔を埋め、二人が顔

を覗き込もうと身動きもしない。

「…寝ちゃった？」

「みたいね」

小さな背中を擦りながら母親は微笑むと、青碧色の瞳で将人を見上げる。

「ありがとう、将人」

腕に触れるように手を伸ばすと、触れられた将人は高さを合わせるように膝を折る。

「云い出すと聞かないからね、遥人は」

大人びた微笑みに首を振ると、母は彼の頭を引き寄せて頬を寄せた。

「将人も我が俣を云っていいのよ？」

「母さん？」

「浩さんをいっぱい困らせていいのに。ちゃんと自分のしたい事をしてね？」

父・浩が将人に持っている過剰な期待を一度も裏切った事のない将人は、優秀な後継者となる事は誰の目にも明らかだった。

まだ十二歳だというのに自他共にその選択以外を念頭におかない事が、メアリーには不思議だった。

その上家族に対しても完璧な長男である将人を甘えさせてやれないのは、自分が病弱なせいであると彼女は思っている。

「結構楽しんでやってるよ？ そんな心配しないで」

両親は仲が良く、自分達兄弟も愛されている事はいつも感じている。不満などなかった。

将人は畳んであった予備の毛布をゆっくりと広げて浩に掛ける。

今日は朝から会議が詰まっていると早朝から不満気だった父は、遅くに帰って来て子ども達と少しの時間を一緒に過ごした後、この部屋で妻の看病をしていたメイドと交代をした。

どんなに疲れていても子ども達との時間を持ち、妻と二人だけの時間も大切にする。こんな父の息子である事は誇りだし、長男として同じように家庭を守り、いつか仕事でも助けられるようになる事は、ずっと以前からの彼の望みなのだ。

そう告げる度に、母は彼を優しく抱き締める。

普段甘すぎる程甘い父親である夫は、教育に関してだけは御堂のトップに立つ為に彼自身が先代から受けたのと同様の物を将人に与え、これまでも妥協という事がなかった。それだけ秀でていなくて認められない世界なのだという。

見守るしかない立場で、否、いつまで見守れるか知れない体で三人の息子の先を案じて、メアリーは祈りを口にする。

「Strong luck to my angel」(私の天使に強運を)

一度将人は聞いた事がある。幸運、じゃなくて、強運？と。同じ事を和人も聞いたと云う。だが、母は笑うだけだった。

頬に口付けられ、囁かれて将人は笑む。

二人の息子が両親共の母国語を自在に操れるようになってから、母は日常から日本語をまるで母国語のように滑らかに話している。だが、彼女は祈りの時は英語で囁く。

彼らは、その謳うような声がとても好きだった。

「母さんも早く寝なきゃね」

ぐっすりと寝入ってしまった遙人を抱き上げ、将人は母に笑みかける。

「今、和人が薬を用意してくれてるんだ。遙人は任せて」

「ありがとう。明日は一緒にご飯を食べるって和人にも云ってね」

「うん。おやすみ」

「おやすみ」

頬に口付けを贈り、足音を忍ばせて扉へと向かう。

父親を起こせば、末っ子の発熱に大騒ぎをする事は目に見えている。

少し時間をおいてから愛妻に起こされた方が、今夜の睡眠時間を僅かでも多く確保出来るだろう。

それを知っている長男は、父をそのままに、母にはもう一度笑って見せてから静かに扉を閉じた。

1.

気持ちのいい、青空が広がっていた。

屋敷の庭に面したウッドテラスでの休日。

夫は妻の肩を抱き、微笑む妻の腕の中には赤ん坊が眠っている。

二人の子どもは芝生の上を、仔犬のようにじゃれ合いながら明るい笑い声を上げる。

温かい——温かい。

それは、幸せの象徴。

「ん…」

耳元で声が聞こえて、何かが動く気配で目が覚めた。
うとうとしていたらしい。

「…ハルう？」

起き上がると気配の元、隣で寝ていた女がもぞもぞと俺がいた辺りを弄っている。

無視して床に散らばっていた服を着ていると、女は上半身を起こして髪をかき上げる。

大きな胸を隠す気もないらしい。まあ、十分に味わったものだから、今更構わないけれど。

「どしたのお？」

「帰るよ」

ボタンを留めながら微笑みかけると頬を赤らめたが、俺の言葉がやつと脳味噌に届いたらしい。不満気に口を尖らせて、上目遣いにこっちを見ている。

：狙っている表情なんだろうけど、申し訳ないが何とも思わない。

「ごめんね。ホテル代ご馳走様」

軽くキスすると、そのままシャツを引かれて口を貪られる。：まあ、いいけど。

「また会える？」

「どうかな？ キミの方が忘れちゃうんじゃない？」

「忘れないよお、すっごく良かったもん。もう他の男じゃ物足りないかも」

：それは、お姉さんの周りの男が気の毒でしょ。

そう云いたくなるが苦笑で止める。云わぬが華と云うものだろう。

「じゃあね」

にっこり笑って背を向ける。

ホテル代くらい払ってもいいけれど、誘われた時の条件みたいだったから遠慮はしない。その分の働きは十分過ぎる程したつもりだし。

時計を見ると日付けが変わるところだった。まだ帰らなくても大丈夫だろう。

俺は鼻歌まじりに人通りの多い道を、いつもの店へと向かった。

「よう、色男」

にやりと笑顔を向けられて顔を顰めた俺を、おっさんは嬉しそうに見る。

ここに来る前にナンパされたから知られていないと思っていたのに相変わらず耳が早い。隠す気もないけれど、からかわれるのは面白くない。

雑居ビルの七階にある『bear's bar』は十席のカウンターと三つのボックス席がある。

おっさんはこのマスターで、でかい図体と顎ひげの濃さが熊みたいな男だ。店の名前もこの風体から取ったんだろうが、おっさんの店かと聞いたら「預かっているだけだ」と云っていた。

時々カウンターには違う男が立つ事もあるらしい。電話で誰かに指示らしい事もしているし、俺は雰囲気的に手下がいるんだあと勝手に思っている。

俺がトラブった時とかもフォローしてくれるし、かなり顔が利くらしい。：知り合って二年経つが、全く得体が知れない。俺が知っている事と言えば『敏郎』と云う名前くらいだ。呼んだ事ないけど。

「相変わらず暇そうじゃん」

店内にはまだ誰もいない。

まあ、平日はこの位の時間から常連がちらほら集ってくる事も珍しくないんだけど。

「お蔭様で」

目の前にマグカップが置かれる。頼まないで出て来るのは、ブラツクコーヒーだ。

「喫茶店じゃないんだから、コーヒーってさあ」

「ん？ 眠れなくなるか？ ホットミルクも出来るが」

おっさんは髭に隠れた口をにやりと歪ませて、俺の髪をかき混ぜた。

このぶっとい腕で頭をガシガシとやられると首がガクガクする。

「やめろって。いいよ、コーヒーで」

腕を振り払ってコーヒーをすする。おっさんのコーヒーはちゃんと手落としてるから、インスタント嫌いの俺としては有難かったりする。

「まったく。あんまり羽目を外すと兄貴が泣くぞ」

ちっと舌打ちして見せてもおっさんの目は笑ったままだ。

この得体の知れないおっさんに俺を会わせたのはその兄貴だ。云っているのはもう一人の兄貴も込みなのだろうが。

「この程度じゃ泣かないだろ、あの人達は」

約束は守ってる。

そう云うと、おっさんは呆れたように肩を竦めた。

「で？ 今日は後腐れなく帰れたのか？」

：嫌な事を思い出させるな。

以前、何度かストーカーみたくなった女とか、彼女気取りになった女とか、やってもいないのに男が脅しをかけてきたとか、そういう面倒もあった。

さすがに俺も学習したので、相手は選ぶようになった。：最初の頃は喰ってたってよりは喰われてたって感じだったしなあ。それでも自分から声をかけない分、人を見る目は育ててきたつもりだ。

そういうのも全部知られているので、おっさんは時々確認してくる。フォローしてくれてるんだから、からかわれているのではないんだらうけど。

「大丈夫だよ。：まあ、二度目はないだらうけど」

「何で」

「今日のお姉さん、ケーサツ。しかも少年課」

「おまっ」

：コーヒー噴き出してやんの。

「最初に年は自己申告したんだけどね」

「笑いとばされただろ」

「いつもの事だよ」

年齢を云ったところで誰も信じない。

本当の事だと分かったらあの女は卒倒するだらう。自分がまさか十四歳とホテルでやりまくったなんて。しかも自分から誘ったなんてな。

「お前ら兄弟は、揃って老け顔だからな」

「老け顔って云うなよ」

「兄弟揃って、顔と体の成長が早い？」

…何で疑問形なんだ。可愛くないぞ。

「兄貴達は、中身が育つのも早かったんだろ？」

「だからって、お前まで早く大人にならなくてもいいんだけどな」

「ガキの頃から可愛げがないのは血筋らしいからさ。…それに、俺は大人じゃない」

少し声が低くなってしまった事に後悔すると、案の定おっさんの瞳が少し暗くなる。ああ、もう。

「酒と女に関してくらい？ 病氣と孕ませる事だけには気を付けろって云う兄貴も兄貴だと思うけど？」

「全くだ」

わざとおどけた俺にくつくつと笑うおっさんの目は優しい。

「まあ、お前のナリじゃ放つとかれる訳がないからな。性質の悪いのだけには気を付けろ」

「喧嘩と逃げ足の速さには自信がついたよ、お蔭様で」

「いいトコの令息にゃ、自慢にならん」

「放つって」

十二歳の時に街に連れ出してくれたのは、二番目の兄貴だった。殆ど軟禁状態で屋敷に閉じ込められていた俺には新鮮な事だらけだったが、何より驚いたのは誰も俺を子どもだと思わない事。

二分の一外国の血が入っているせいなのか単なる血筋か。兄貴達も子どもらしくなくなるのは早かったらしい。

それまで制服を着ていれば、高校生に間違われるのが精々だった

んだ。面白くて調子に乗っていたら、そりゃあヤバイ経験もした。相当性質の悪い奴らはこのおっさんが陰で何やらやってくれていたらしいが、大体は自分で何とかした。おかげでかなり処世術も学べたと思う。

今では殆どトラブルる事もなくなったし、ゴタついた連中の中には一緒に飲むくらいになった奴らも少くない。

まあ、二年あれば何とかなるもんだ。

けれど、おっさんが性質の悪い連中を相手にどう立ち回ったのかは聞いていない。聞いたが「ツテがあつてな」の一点張りだ。

まあ、今はそれでもいいのかもしれない。

兄貴達の事もよく知っているらしいおっさんは、俺の事を単純に子ども扱いしてくれるから。

カシュツと音がしておっさんが美味そうに煙草を燻らせる。

太い指のせいで煙草がチビて見えるのが可笑しい。

「何だ？」

俺にかけないように煙を吐き出す。別に構わないんだけどな。

「美味そうに吸うよね」

「…お前は吸わないんだったな」

「ん。興味ない」

勧められた事もあるけれど、一口貰ってから手は付けていない。敢えて美味しいとは思えないし。

「ウチはさあ、スキンシップが過剰だから。ハグされた時に悲しませたくないじゃん」

家族にとって俺は未だに愛すべき子どもなのだ。

ウチは何故だか「子どもは天使」だと云う言葉を平気で使う家なんだ。事実、チビの頃の俺はそりゃあ愛らしい天使のような見かけだったらしい。

写真を見せられたら反論は出来ない。絵に描いたような天使っぷりに啞然とする程の可愛らしさだ。末っ子のせいかなそれは今でも継続されているらしい、家族の目には。

さすがにヤニ臭い天使はいらないだろう。

身長百七十五センチの天使ってのもキモいけど。

「お前のそういう素直なところ、すげえ可愛いよな」

「恥ずかしい事云うな」

妙に嬉しそうなおっさんを一睨みしてマグカップを置く。

「帰るわ」

「早く寝ろよ。明日も学校なんだろう」

もう十分遅いっての。完全に夜時間の人には早いんだろうけど。

「多少の寝不足なんて、優等生の俺には関係ないし」

「眠いだろ、昼間」

「眠い時は寝る。中坊の勉強なんて教えてもらわなくても一度教科書を読めば分かる」

「可愛くねえ」

「自覚してるよ」

ひらひらと手を振って店を出る。

道は、まだまだ夜はこれからだという連中で溢れかえっていた。

2.

「おかえり」

音を立てないようにバルコニーから部屋に入った俺に向けられたのは、柔らかな笑顔だった。

バルコニーから部屋を抜け出す方法も、セキュリティの厳しい屋敷を夜中に出入りする方法も、この人が俺に仕込んだのだから、帰って来て待ち受けられていても慌てる事はない。

「ただいま」

いつものようにそのまま素通りして部屋に付いているバスルームに入る。

おっさんの店に寄ったおかげで時間は経っているが、まだ体にあの女の香りが纏わり付いている気がする。

この匂いのまま自分のベッドに入るのだけは嫌だ。

「夜更かしだね、和兄」

髪をタオルで乱暴に拭きながら、冷蔵庫から出したミネラルウォーターをボトルのまま飲む。兄の和人はソファに座って長い足をゆったりと組んでいた。

「大学生にとっては普通の活動時間なんだ、まだ」

「：確かに」

俺が向かいのソファに座ると、和人はテーブルからカップを取って口を付けた。

カップに紅茶がたっぷり入っていると場所を見ると、おっさんから店を出た連絡でも入っていて見計らって部屋に来たのだろう。いつもの事だ。遊ばせてくれてはいるが、過保護なのは事実だから。

「最近、おっさんの店行ってる？」

「時々ね。敏郎さん、遙人の事が可愛くてしょうがないらしい。俺を見ると、昔は可愛かったってグチるからね」

「どんだけ昔の話だよ」

和人と俺は八歳年が離れている。二十二歳の和人は高等部に入る前には既に今と同じような見かけだった。

一番上で父親似の将人は二十歳を過ぎるとごつく男臭さが増したが、和人は昔から母親に似ていたせいかな柔和な感じがしていた。それは今も変わらず、多少男っぽくなったという感じだろうか。

和人よりも母親の血を濃く受けたらしい俺の見かけはハーフなのか外人なのか微妙な感じだし、既に大人に見えるらしい。和人の成長の仕方を考えても、きっと俺も今くらいの成長で暫くこのまま変わらないだろう。

「今日、将人は？」

「出張らしいよ。帰れないから遙人を頼むって煩いったらない」

たかだか一泊で、と和人は苦笑まじりだ。

いつも俺が帰って来ると将人か和人、それか二人ともが必ず顔を出してくれる。

煩わしいと感じるのなら俺も反抗期なんだろうかとも思えるが、今の所それはない。

二人が俺の事を大切に思ってくれているのはよく知っているし、俺も二人がとても好きだ。

何より、このでかい籠から出してくれたのは、二人だったんだか

ら。

「出張かあ。朝何も云ってなかったんだから、また急に決まったのかな。若い専務は大変だ」

将人は二十四歳。子どもの頃から『御堂』のトップである父親の片腕になる為に努力を続けてきた。

父親は後を継がせる気で見たいんだけど、『御堂』という会社を長く繁栄させてきた先代もそのまた先代も、単なる世襲で社長になった訳ではないらしい。

頭がキレル奴が親戚に多いのは事実。将人は勿論、和人も俺だって例外じゃない。ただ、それだけでは認められない。

将人も英才教育みたいに帝王学を叩き込まれたくせに、大学にいるうちに会社に入った時はただの営業でボロ雑巾みたいになって走り回っていた。

大学を卒業するまでに周りを納得させろという父親の無茶な条件をクリアした将人は、本当にさすがだと思う。

「明日には帰って来るよ。あんなに莫迦みたいに働いて、いつか倒れなきゃいいけどね」

「本人に云ってやれば」

「充実してるって云うものはしょうがない。せめて遥人が癒してやんな」

「：男を癒すって云ってもねえ」

「いいんだよ。遥人が笑ってやれば、将人の奴上機嫌で気力体力が復活するんだから」

にっこり笑われて肩を疎める。怖ろしい事にそれは事実だ。：ブラコンにも程があるけどな。

「俺、もう寝る」

「――明日、親父も帰って来る」

体を伸ばそうと上げかけた手が止まる。

「…久し振りだね」

「明日は家にいろよ」

「分かってる。…ありがとう」

俺が屋敷を抜け出している事は、兄弟だけの秘密。

兄貴達が万策を敷いてくれている。それを俺が壊す訳がない。
頷くと、和人は柔らかに笑った。

「おやすみ、いい夢を」

頬に口付けて抱きしめるのは、母さんが生きている頃からの習慣。
さすがに日本では普通しないともう知っているが、俺達には当たり前の挨拶だった。

おやすみ、と返すとポンと温かい手が頭に寄せられた。
その感触を残して、和人は自分の部屋へと戻って行った。

3.

朝、兄弟で朝食を取り学園に向かう。授業を一通り受けて向かえの車に乗って帰宅。兄弟が帰宅している時は一緒に夕食を取るし、いなければ一人で夕食。

この繰り返しだが、学園の幼等部に入ってから俺の生活の全てだった。

学園以外での外出は一切認められない。

学園では級友はいても親しい友人をつくろうとは思わなかったのだ、放課後の不自由に不満を感じた事はない。

欲しいものは買い与えられ、そういう意味での不自由も一切なかった。

日本経済の鍵を握るとまで陰で云われる『御堂』の名前は伊達じゃない。

屋敷の外に出なくても、何不自由なく生きていく事は出来た。

何もかもが与えられる生活。唯一持っていなかったものと云えば

——自由。

与えられるもの以外、俺にはなかった。

「遙人」

ソファに寝転んでいた俺はノックと同時に入って来た大男に押しつぶされて、ぐうと呻く。

「将兄っ 潰れる…ってか、今俺潰れたよねっ？」

ぎゅうつと締め付けられてじたばた腕を動かしても、将人の体はびくもしない。

いつ鍛えているのか知らないが、将人の体は筋肉質で中々逞しい。

「はあああ、疲れたっ。やっぱり家がいいな。ほら、土産」

おかえり、と頬擦りするとやっと開放された。

おかえりはちゅうだろ、とかつて大の男が云う事か。疲れ過ぎると壊れるんだよな、こいつ。

土産と指差されたのは地方の銘菓だ。

「ガキじゃないんだから、お菓子ばかり買って来んなよ」

「子どもだよ、お前は。一気に食べるなよ」

「食べないよっ」

頭をかいぐりかいぐりされて口を尖らせると、将人は目を細めて笑う。いつもは撫で付けているのにすっかり乱れてしまった黒髪をかき上げると手を差し出してくる。

「夕食だ。行くぞ」

俺はその手を取らずに将人を見上げる。

確認してからじゃないと無理だ。俺には心の準備が必要なんだ。

「…父さん、は？」

父親は母さんが死んでから滅多に帰って来なくなった。

マンションなら幾つもあるから、その何処かにいるらしい。俺は知らないけど。

何度も何度も将人や和人、そして使用人達から聞かされた。

母さんが生きていた頃、俺が三歳までは父親は家族にべったりだったらしい。

仕事で結果を出しながら家庭を大事にする。理想の男と云われていたと云う。

どれ程大事にされていたか——母さんが、俺達が。

あまりにも聞きすぎて、覚えている筈のない情景を夢にまで見られる程だ。

疑う気はない。それを話してくれる皆の懐かしむ顔を見れば。

けれど、だから尚更分からなかった：いや、分かってしまったから困る。

母さんが死に、俺は屋敷に閉じ込められた。

外界全てから隔離され、更に父親は俺から自分をも隔離した。

将人が説得してくれて何とか学園に通えるようにはなったが、許されたのは学園の塀の中だけだった。

母さんは体が弱かった。俺も一緒になってよく寝込んでいたらしい。

それは驚く程の頻度で、同調しているようだったと皆が云う。

俺まで失いたくなかったのだろう、そう云われた。

だからって行き過ぎじゃないか、とも今なら思うが、それが本当なんだろう事は想像が出来た。納得してしまった。

だから、与えられる生活を受け入れた。

俺は兄弟で一番母さんと似ている。

何より、瞳の色が同じだ。

日本人とイギリス人とのハーフで滅多に現れないと云われる青碧色。兄弟では俺だけ。

父さんは、これを見るのが辛いらしい。

そう気付いたのは、目を逸らされ続けて何年も経ってからだった。気付いてしまえば、恨む憎むなどという負の感情は持てる筈がなかった。

「――帰って来てる」

「そう…」

頷いて、立ち上がる。

息を整えて歩き出す。

ほんの少しの間、静かに過ごせばいいだけなんだ――。――。

「遥人、幾つになった…?」

一瞬、肩が揺れなかっただろうか。

そればかり気になって、表情を気にするのを忘れた。

案の定、食事を終えた父さんは、真っ直ぐに向けてしまった俺の視線を避けるように目を逸らす。

…久々に話しかけられた。しかも微笑みながら。

「あ…十四」

「そうか、早いな。いつの間にか背だって…和人くらいあるか?」

「いや、まだ。でもすぐ追い越すよ。将兄もね」

「もう危ないんだよねえ」

「親父がデカイから、俺達もどんどん伸びたしな」

目線を兄貴達に送ると、どうやら俺の意図は分かってくれたらしい。息を吞んで俺達を見ていたが、はっとしたように会話を繋いでくれる。

正直、笑顔はつくれるが、こういう風に会話したらいいのか分からない。

父さんとは殆ど会話をした覚えがないんだ。

それでも、せっかく父さんの歩み寄りを無駄にしてはならないとだけ、頭の中で必死に繰り返していた。

「さて、そろそろ先に休もうかな」

いっぱいだった俺はどの位時間が経ったかなんて分からない。だが、父さんが立ち上がった時、目の前のコーヒーはすっかり冷めていた。意識せずにつきそうになった息を止めると、隣の和人が腰を上げる。

「父さん、ちょっと話があるんです。部屋に行ってもいいですか？」

…何だ？

先刻まで柔らかいいつもの表情が和人から消えている。

咄嗟に将人を見るが、関知しないとしても云うようにコーヒーを飲んでいる。

これは、内容を知っている顔だ。

「ああ、構わないよ。すぐが良ければ一緒に行くかい？」

「はい」

二人は食堂を出て行く。

扉を抜ける寸前、ちらりとこちらを振り返った和人はにっと笑って見せた。

「心配するなってさ」

「：何の話をするか、知ってるんだ？」

「その内お前にも話してくれるよ」

小さな笑みは何か淋しそうな、将人らしくないものだった。

4.

「ハル！」

薄暗いホールに入ると、すぐに声をかけられた。

ここ辺りでは比較的キャパの大きいライブハウスだが、今日は壁沿いにいくつもボックス席が設えられていつもとは違う雰囲気だった。

バーカウンターでチケットの半券とドリンクを交換していた俺は、声の男に手を上げる。

「都己、お疲れ」

茶髪でピアスを左右で八個も開けている男、見るからに軟派な笑顔に笑い返す。

「サンキュ、来てくれたんだ」

「チケット買わせといて何云ってんだ」

「喜んでるんだって。あっちに樹達いるから」

慌しく踵を返して行く。

都己とは街に出てから知り合った。最初は何処かのバーだった。もう二年近く前の事だ。

DJをやっていて、今日はパーティーをするから絶対に来いと約束を取り付けられたのだ。

あちこちに声を掛けながら移動して行く都己は楽しそうで、見ているだけで嬉しくなってくる。

「何にやついてる？」

振り返ると、金髪をつんつんに立てた男が立っていた。

「裕也」

「ほら、こっちだ」

都己の仲間の一人、裕也　は顎で先刻都己が指した方向を示す
すたすたと歩き出す。

「で？　何笑ってたんだ？」

「何か、都己が張り切って楽しそうだなあとかさ」

「そりゃ、ハルが来たからだろ」

なんだそりゃ。

突っ込もうとしたが、急に肩に掛かった重みで出来なかった。

「ハル、遅かったじゃんっ」

：こういう事をするのは樹だ。

首っ玉にしがみつかれ、髪がかき回される。

「樹、こぼれるっ。何、もう酔ってんの？」

「んな訳ないだろ。だってハル付き合い悪いからさあ。来たら嬉し
い、これ普通だろ？」

相変わらずストレートな奴。

樹はにこにこ笑いながら、陣取っていたらしいボックス席に俺を
引っ張り込んだ。

こいつらは何だかんだと社会人。二十四、五だったかな。

俺は基本的に自分の事は話さないけれど、少し年下位に思っている筈。学生だとは云ってあるし。

街に出て、いや、出る前から考えても俺にとって初めての友達だ。

「ほら、都己の莫迦だってはしゃいじゃって」

指の方向を見ると、都己が手を振っている。

苦笑するが、その手前にはこちらをちらちらと窺う視線が山ほどあつて手を振り返すのは考えものだ。

…こいつら目立つんだよな。

「何、俺達のせいみたいな顔してんだ」

裕也に小突かれる。

呆れた顔してるけど、あんたが相当モテるのを俺は知ってるぞ。

「…人の心を読むなよ」

「分かりやすいんだよ、ハルは」

「うるさい、ポーカーフェイス男」

「悔しかったらやってみな」

お前の年になる前にはな、と云えないのが悔しい。

畜生。こいつらとつるんでると、本当に自分がナリだけなのがよく分かる。

裕也は普段表情を隠すのが上手いくせに、ふと出る表情とか言葉とかがすごく優しい。都己は明るくて賑やかで人を盛り上げる。どんなにこつちが落ちてても、気付かない振りをしながら相手を気遣うんだ。樹は犬みたいに人に懐いて甘える。それは、かえって甘えられたこつちが安心する位邪気なく真っ直ぐに向かってくる。

何でこいつらは、こんなに優しいのか最初は分からなかった。きっと人として、人に優しくする方法を皆知っているのかもしれない。

俺はまだガキで、自分の素性がバレないようにするのが精一杯だ。「：にしても、ハル。誰かお持ち帰りする？ 選^どび放題みたいだけ^ど」

樹が肩を竦める。

確かに、視線を向けたら絶対寄って来そうなこの雰囲気。正直面倒くさいな。

「樹が持ってかえれば？」

「俺じゃないよーこの注目は」

にやにや笑うが、俺一人が目当てじゃないのは分かっている。よく街で樹達に声を掛けてくる女の顔だってある。だからモテるんだって、こいつら。

「今日はそんな気分じゃない」

「そっかー。じゃ、今日は男同士で」

くひひつと笑う樹。可愛いぞ、ちょっと。

莫迦話をしていると、背後でカシャンという音が聞こえた。

後ろのボックスからだったが、大した音じゃないので二人とも気にしていないようだ。

何だか小さな声が揉めている感じがして、ちらりと振り返ろうとした時にその衝撃がきた。

「何しやがるっ」

…それは俺の科白だろう。

甘い液体は髪からかなり思い切り俺を濡らし、白いシャツは肩から胸にかけて赤くなってしまっていた。

足元に氷が転がっていく。

「うわっ ハル、大丈夫っ？」

「…染みになるな、それ」

樹と裕也の声は殆ど聞き流していた。

振り向いた先にいたのは肩までの長髪男。俺の視線はその男の向こう側に釘付けだった。

振り返った瞬間に見た、長髪男を睨みつける黒瞳。

吸い付くように目が離せなくなった。

「ごめんなさい！」

その女が悲鳴に似た声を上げる。手に持っていたグラスは空だ。慌てる様子には先刻のぞくりとした雰囲気はなくて、俺は我に返る。

長い黒髪の…美人。細くて背が高い、目を惹くタイプだ。

「ふざけんなっ」

彼女と俺の間に立つ男が吼える。

俺と背中合わせのソファに座っていたという事は、俺はこいつの代わりにカクテルをかぶったのか。

何をやらしたのかは知らないが、グラスの酒を浴びせられるってのはあまりないだろう。

「ふざけないのはお兄さんでしょ」

彼女に向かって振り上げた男の右腕を後ろから掴む。

勢いを封じるのに多少腕に力を込めたが、取りあえず体格で俺の勝ちだ。

「この場合、俺は怒っていいよね？」

裕也を見ると、にやりと笑みが返ってくる。

「連れに恥をかかされた俺達にも、その権利はあるだろ」

裕也も立ち上がって男を見下ろす。

金髪頭な上に切れ長な目が鋭く見えない事もない。元々の見た目が見た目だけに、裕也は怒ると相当怖い。ま、今はわざとだろうけど。目が笑ってるもんな。

両脇を俺達で固められた男の前で、いつの間にか樹がしゃがみ込んで首を傾げていた。

「おにーさん。ここで騒ぎを起こすと、怖い人達にもっと囲まれるよ？　ここに來てる連中、皆仲間だから」

すうっと息を吸うと、にんまりと笑う。…目が据わってる。

「試す？」

男は小さく「ひっ」と声を上げると、俺の手を振り払って転がりそうな勢いで走って行った。

「あらら、物分りいいねえ」

にこにこと笑う樹に溜め息が出る。

「：俺は樹が一番怖い」

「はったりも芸のうちなんだよー」

苦笑いしていると、目の前におしぼりが現れた。先刻の彼女だ。

「どうも」

受け取ると首と髪を拭く。首からシャツの中にまでカクテルは流れ込んでしまつてベトベトしている。

「ごめんなさい、ありがとうございました」

深々と礼をされて、首を振りながらソファに座る。

彼女は二人連れらしい。隣の女の子も小さくなつてしまっている。もう一人は黒髪の彼女より小柄で、美人というより可愛いってタイプだ。

怪我をしたって訳でもないのにそんなに恐縮しなくても、と笑つて見せる。

「気にしないでいいよ。勇ましいお姉さん」

「な：あれは、あいつがこんなトコまで付きまどつて来るから」

ごによごによと口の中で言い訳している彼女は、相当可愛かった。

「付きまとわれてんの？」

「ああ、ううん。とにかくごめんなさい。クリーニング代」

「いない」

カバンを探ろうとした彼女を制する。

代わりに名前でも、と云いたいところだけれど、ちょっと注目を集めすぎたみたいだ。

すごい周りに見られている。

「でもっ」

「すぐ洗うからクリーニングなんかしないよ。俺行くね、都己に謝っというて」

後半は樹と裕也に。二人はひらひらと手を振っている。うん、そのあっさり加減好きだなあ。

ここで赤く濡れた俺がじたばたしていると、いつまでも人目を引くだろうからっていうのは通じている。

都己にはもう会ったし、事情は二人が説明してくれる。笑って許してくれるに違いない。

「お姉さん、男にあんまり喧嘩売らないようにね。手を出す前に大声出したほうが安全だよ」

片目を瞑って、彼女がうつと怯んだ隙に横をすり抜ける。

すれ違う瞬間に彼女だけに聞こえるように「またね」と言ったのはご愛嬌だ。

「また」なんて、ないだろうけど。

5.

…夏で助かった。

頭から水を被って髪を濯ぐと、大きく頭を振る。

「あ…ヤベ」

顔を上げると鏡はずぶ濡れだった。

ま、拭くのは後でいいだろう。気にせず脱いでおいたシャツをざぶざぶと濯ぐ。

赤い染みは完全には取れないが、まあ薄くはなる。夜中に歩くときに目立たなきやいいからな。

おっさんの店『bear's bar』は雑居ビルの七階にある。甘ったるい匂いのまま現れた俺に、おっさんはトイレの洗面台直行を命じた。

狭苦しい洗面台で自分も服も洗うのは、中々苦勞する。手を洗ったり女の化粧直しには広いんだろうけど、何せ体を屈めて髪を濡らさなきゃならないんだから。

「よし、こんなもんか」

硬く絞ったシャツを広げる。

捨てても構わないんだが、今は替わりがない。ま、干せばいけるだろう。

「おっさん、タオルもう一枚ちょうだい」

扉を開けて大声を出す。

あちこち濡らしまくっているのを拭かないと、絶対殴られるだろうからな。

「あ」

髪をぐしぐし擦っていると、おっさんじゃない声がした。

「ひゃっ」

女の声？

濡れた前髪とタオルの隙間から見ると、女二人連れが先刻までは無人だったカウンターに座っている。

叫ばれたのは、俺が上半身裸だからか？ Gパンは履いているから気にせずに出てきたんだけど。

「あれ」

「あ…先刻の」

俺に酒をぶっかけた美人だった。連れも同じ。向こうも俺に気付いて目を瞠っている。

「先刻はごめんなさいっ …ひょつとして、すぐ洗うって」

「うん。今、洗った」

少し掠れた声がセクシー、なんて思いながら笑うと、美人は俺の手からシャツをひったくった。

「やだっ こんないいシャツ思いつき絞っちゃって。やっぱりこれ、クリーニングに出した方がいい物じゃないっ」

シャツを広げて綺麗な顔を歪めている。

まあ、確かに物はいいいんだろう。でも、それ程こだわる物でもないと思うんだけど。

彼女からシャツをやんわり取り返すと、厨房にいるおっさんを覗く。

「おっさん、シャツどこかに掛けといていい？ 帰りまでに少し乾かしたいからさ。後、タオルもう一枚貸してよ」

「ハル：俺の店で脱ぐな」

溜め息混じりに云われて、思わず舌打ちをしてしまう。人を露出狂みたいに云うな。

「あんたが洗いに行かせたんだろ。代わりに着る物なんて持ってないんだよ」

「俺の上着とか」

「ヤだ、暑い」

きっぱりと云う俺に、おっさんはやれやれと溜め息をついた。

「どうにかするよ」

シャツを差し出された手に渡す。どうにかなるのか？

「で？ タオル？」

「うん。洗面台とか濡らしちゃったからさ、雑巾の方がいいのか？
：他に客が来る前には思ってたんだけど、ゴメン」

小声で云うと、頭に掛けたままのタオルの上からがしがしと頭をかき回された。いつものように頭がいい様に揺れる。

何だよ、人が申し訳ないと思って云ってるのに。と思ったら、おっさんは笑っている。

「風邪ひくなよ」

髪を拭いている柔らかい物じゃなくて、使い古らしいゴワゴワしたタオルをまとめて渡されたのもう一度トイレへ向かう。

「私、やりますっ」

鏡を拭き始めたら、後ろから声を掛けられた。先刻の美人だ。相当気にしてんのか。

俺は肩を竦めて見せるとタオルを彼女に渡す。それで気が済むのなら、遠慮しない方がいいのだろう。

「じゃあ、お願い」

「…なんで、天井まで水浸しなの」

天井から落ちてきた雫に気付いたのだろう。って云うか、気付くの遅いよ。

「水が飛んだから」

「まさか。ここで水浴びでもした…?」

本気で云っているらしい表情に軽く吹き出したら睨まれた。

あ、やっぱりこの目力、いい。

「天井とか壁は俺がやるから。下の方をお願い出来るかな。床はモップがここの物入れに入ってるから」

「うん」

ロッカーのような物入れには小さな脚立や掃除用具が入っている。脚立を出しながら見せると、彼女は珍しそうに中を覗いていた。

時々手伝いをする俺には珍しくもないが、面白そうに覗いているのを見ると、興味津々という感じだ。

苦笑しつつ脚立を開くとロックをかけて安定させる。

俺が天井に手を伸ばして拭いている間に、彼女はてきぱきと鏡と洗面台を拭いていく。

手際がいい。あっと云う間に、床にまで広がった水溜りは姿を消していった。

…そう云えば、まだ名前も聞いていなかったな。

「ねえ、名前教えて」

「え？」

何で意外そうな顔をするんだ。偶然に二回も同じ日に会って、しかもかなり気に入ったんだ。名前くらい呼ばせて欲しい。

「お姉さんって呼ぶのも何でしょ」

パーティー会場ではそう呼んでいた事を思い出したのか、彼女はくすりと笑った。

——笑うと、少し幼くなるのか。

「葵、よ。藤本葵」

「よろしくね、葵さん。俺は」

「ハル、でしょ」

自己紹介を取られた。何で？

「あなた、この辺の女の子達の間で有名なもの」

…？

眉間に皺が寄った。云われている事が分からなくて。

まあ、逆ナンは多いし、何処の店に行っても声は掛けられるけど、一応目立たないようにしてるつもりなんだ。有名と云われる覚えはない。

「『追わないハル』ってね」

「何それ」

天井を拭いて壁も拭き終わった俺は、洗面台に腰を預けるように寄りかかっている葵の前に立った。

結構背が高い。百七十センチ位か？俺と十センチまで違わないだろう。

「日本人離れた綺麗な顔、時々色が変わる不思議な目。声は甘くて、優しい人。皆、貴方を見ると吸い寄せられちゃうんですってよ？」

黒い瞳が見上げてる。睨んでいる時のような激しさはないけれど、強い瞳に俺の方が吸い寄せられているみたいだ。

「でも、貴方は誰も追わないし、離れて行っても追いかけない」

それは、素性がバレないように。それに、そこまでのめり込む女がいなかったただけだ。

ちよつと気に入った位じゃ、何度も頻繁に会う訳にはいかないから。

「貴方に抱かれたっていうのはちよつとしたステータスなのよ、知ってた？」

「皆にモロバレって事、かな？」

今まで関係した女を思い浮かべる。

：駄目だ、とても思い出しきれない。

俺から誘いをかけることは、まずない。でも誘われればあまり拒まなかったからな。

無差別にやって来た訳じゃないとは云えるけど、ちゃんと付き合った女はいなかったから、噂になっても仕方がないのかもしれない。

好きとか嫌いとか恋愛とか、俺の前に現れて媚を売る女はそういう相手じゃなかった事だけは確かだ。：おかげで、まともに付き合いとかの前に俺は女の体だけには慣れる事になったんだけど。

とにかく、後腐れがない分、そういう話もオープンなタイプが多いって事か。

「喋る子はいるわね。でも、そういう子は誰としても云うから。：でも貴方のセックスが相当いいって事だけは皆知ってる」

「：誘ってる？」

何だか、かなり複雑な気分だ。この美人があけすけな言葉を使うのも。それが自分の事だっていうのも。

小さく笑うと、葵はにやりと口の端を上げた。

「ちっとも？ 客観的に私の耳に入ってきた話なだけ」

その不敵な笑いに俺の手が動く。体を屈めて素早く唇を塞ごうとしたら、乾いた感触がした。

「…ずるい」

「どっちが？」

俺と葵の間にはパイルの感触。俺の首に掛かっていたタオルの端を壁にされていた。

——構うか。

頭を後ろから支えてそのまま唇を押し付ける。タオル越しに葵の息が熱い。

「『追わない』ねえ」

タオルを奪い取ってやろうかとも思ってたけれど、他の女のようにどうしても良くなってしまいそうで。まだ、葵を知りたい気がして顔を離す。

ほんの、悪戯だったような顔をして。

体の奥からじんわりと湧き上がる衝動に蓋をする。

俺は葵の少し上気した頬を指で辿って、微笑んで見せた。

「じゃあ、今のは俺から追った初めてになるかな」

「光栄だけど、次はないわね」

「そう？」

「だって、私はずっと追いかけている人があるもの」

葵の笑顔は幸せを絵に描いたようで、妬けるとか、ショックとか、そういう気分にならない自分が可笑しかった。

幸せなら良かった、と云いたくなるこの感じはなんだ？

「…半裸で人の女に迫るように育てた覚えはないんだけど」

突然掛けられた声に体が一瞬固まるが、辛うじて何気ない振りで葵から手を離れた。

この声に、女を口説いている所はさすがに見られたくない。いや、口説いてないし、口説かないって決めたトコだしっ

「カズ、早かったね」

「ちよっと予定変更。雪乃に聞いたよ、大変だったみたいだね」

ドアの向こうに立っていた和人が、普通に葵と話している。目が点になっている俺は置いてきぼりだ。

「透さんは？」

「まだみたいだよ。…遙人？」

和人が俺に声を掛けた途端、葵も俺と似た表情になる。兄弟つてのは知らないらしい。結構似てると思うんだけどな。

何となくこの状況が気まずくて顔を引き攣らせた俺に、和人は苦笑している。…やっぱり見られたか。

「ちゃんと拭きな。服も持って来たから」

「うん。ありがとう」

タオルで髪を擦られる。渡されたのはブティックの袋で、こんな時間だっというのに買って来たらしい。…懇意にしてる店でも開けさせたのか。滅多に強引な事はしない和人にしては珍しい。

おっさんのどうにかするってのは、和人に買って来させる事だっ

たのか。

「カズ、ハルと知り合いなの？」

「和人、葵さんと知り合い？」

和人への質問は見事にダブった。顔を見合わせると、俺達より先に和人が軽く吹き出した。

「ハル？」

「葵さん？」

もう一度ダブる。

和人は…楽しそうだ。

「葵ちゃん、これ、俺の弟」

「…弟の遙人です」

目で促されて、俺も名乗る。普段は『ハル』だが、和人や将人が弟だと紹介してくれる人に対しては、俺は『御堂遙人』だから。

「え…だって、カズの弟って、十近く年が離れてるんだって云ってなかった？」

ああ、鋭いよ、葵。弟ってトコよりも、あんたが驚くのはそのポイントだろう。『ハル』を知っているなら。しかも、あんな生々しい会話をした後なんだから。

「八つ違いだよ、正しくは」

和人はいつもの柔らかい笑顔で答えている。本当に楽しんでるな、こいつ。

「カズって、透さんと同じ年よね？あれ？」

混乱してても可愛いぞ、葵。俺はその反応には慣れているので平然とさせてもらうから、思う存分驚いてくれ。

「ウチは成長が早くてね。俺も十四の頃はこんな感じだったよ」

葵の混乱していた回線が繋がったらしい。俺を一度まじまじと見て、さすがに可愛いとは云えない程大口を開けやがった。しかも、俺に指をつき付けながら。

「えええ————っ!？」

6.

葵の連れは、和人の彼女だった。大学の後輩らしい。

長門雪乃。素朴で可愛い雰囲気、いかにも和人が選んだという感じがして納得する。

ブラコンと云うなら云ってくれ。それがウチの兄弟の基本形だしな。

俺は、彼女と並んだ和人が見た事がない程幸せそうなのを目の当たりにして、もの凄く嬉しいんだ。

「そうかなって思ったよ？ 遙人くん、和人と似てるもの」
「うーん：そう云われると、似てる、かなあ」

葵は全く気付かなかったらしいが、雪乃さんは『ハル』が和人の兄弟かもしれないと思っていたと云う。

俺も和人も母親似だから、一度そう思って見れば似て見える筈だ。つまり、そう思わなきゃあまり似ていないって事なんだけど。和人はどう見ても日本人顔だし。

「遙人くん、ありがとうな。本当に」

葵の隣に座った男が云う。

俺は笑いながら首を振る。

最後に現れた男は、葵の口から何度も出ていた『透さん』だった。小柄なその男は、形容するなら『可愛い』だろう。

俺よりよほど若く見えるその顔は、綿菓子を思い出す程優しそうな微笑みを浮かべていた。

雰囲気そのものが柔らかい。それはもう、毒気が抜ける程。

二人の様子を見ていれば、ベタベタのカップルなのが痛い程分かる。

何より透さんという葵は、物凄く可愛かった。

「偶然ですよ。俺の連れもいたし」

話して分かった事は、葵は大学に行きながらモデルをやっているという。

パーティーで俺が追い払った男は、偏執的なファンらしくてストーカー紛いの事をされている。

行く先々に現れて声を掛けてくるとか、飲みに誘うとか、警察に相談するネタにはならないのは俺にも分かった。

「でも、葵さん。本当にあの時殴られると思った？」

俺は男の腕を掴んだから分かる。あの男、本気だった。だからフアンだと聞いてもピンと来ないんだけど。

「ん、多分」

「…百万回、俺にお礼云って下さい」

呆れる。あんた、顔は商売道具じゃないのか。

それ以前に、あの時腕に込められていた力で殴られていたら、多分ただじゃ済まなかったぞ。

はあっと息をついた俺に、葵は頬を膨らませる。

そんな顔したって、痛い目を見るのは自分だろう。

「透さん、苦勞してそうです」

「まあね」

くすくす笑うこいつも侮れない。

慣れている感じを見ると、いつも見守っているんだろう。無鉄砲で気の強いこの彼女を。

「透さん、ひどい」

「本当だよ。少しは自覚してもらわないと。遥人くんがいなかったら怪我をしたかもしれないし、雪乃だってとぼっちを受け取ってもらえないんだから」

「でも、雪乃にまで絡んできたから、つい」

「つい、じゃないよね？ 他に方法を考えるべきだろ。噛まれたら噛み返す？ 同じ土俵で殴り合うつもりだったのかい？」

あれ。

優しい顔のままだけど、この人実は物凄く怒ってないか？

「遥人、遥人」

小さく横から呼ばれると、和人と雪乃さんがグラスを持って立ち上がるところだった。

手招きされるので、俺もグラスを持ってカウンターに移動する。

「あれ、始まると長いから」

「あれ？」

ちよいちよい、と雪乃さんが指差しているのは今まで座っていたボックス席。

「葬がやり過ぎた時は、透くんのお説教が一番効くの」
「説教…確かに」

説教だな、あれは。

「帰ってからやれってのに」

和人のぼやきに笑いが漏れてしまう。

って事は、二人が帰る家は同じなんだろう。本当に帰ってからやりゃあいいのに、黙っていられなかったんだろうな。

何だか、透さんって人に好感が持てた。葵にはぴったりかもしれない。

透さんの横で小さくなっている葵の姿は、かなり微笑ましい。

さて、あっちのカップルはもう放っておくとして、こっちの二人の邪魔をいつまでもしているのも何だか悪いだろう。カウンターの下で繋いだ手にも気付いてしまっている事だし。

「俺、帰るわ」

「え」

「もう？」

何で二人とも焦る？　…って、ああそうか。和人にしたら、俺と雪乃さんをもう少し馴染ませたいのか？
もう十分気に入ってるんだけどな。

「またね、雪乃さん。他に人がいると俺は『ハル』だけど、また会ってくれる？」

「うん。私も葵と早い時間ならここに来るし、和人ともここでよく待ち合わせするから」

「わかった。和兄に止められなかったら、早めに覗く事にする」

ちらりと和人を見ると、にっこり笑っている。止める気はないらしい。

俺は和人に聞こえないように、雪乃さんの耳元で「和人が幸せそうで安心した。ありがと」と囁く。和人も俺に安心した、なんて云われたくないだろう。

雪乃さんが赤くなってはにかむように笑ったので、その頬に軽く唇を当てて。

「ひゃっ」

「遥人っ」

体を締めさせた雪乃さんと腰を浮かせた和人に、にやりと笑って見せる。

「ウチの挨拶、慣れておいた方がいいよ」

二人で顔を見合わせてから、和人は俺を追い払うように手を動かした。

よし、顔は怒っていないから伝わっただろう。

からかいたかったのもあるが、歓迎の意味を込めたつもりだ。

「じゃあ、声かけないけど二人にもよろしく」

おっさんに目でじゃ、と合図して店を出る。

エレベーターを降りてビルを抜けるが、すぐにはタクシーに乗る気にはなれなくて、何となく通りのウィンドウを眺めて歩く。

ファッションビルのガラスの中に、それはあった。
立ち止まり、瞬きを忘れる。

知らないブランド：女のブランドなんて知らないけれど、でもそのポスターは一番目立つ場所に置かれてライトアップされていた。

白黒の写真。

タイトなドレスから伸びた白い手足。長い黒髪は風邪になびく瞬間を捉えられている。

こちらを見ているのは、挑発的な瞳。

意思の強い、俺を吸い寄せるあの時と同じ瞳だった。

「葵…」

初めて本気になりかけた。それ程、この瞳はあの瞬間俺を驚掴みにしていた。

始まった途端に終わった筈の想いが、足元から駆け上がってくるのを感じる。

出逢えてほんの数時間後には、他の男との幸せを祈れた女の瞳。

この瞳を諦めるのにはどうすればいいのか。

彼女をとうに諦めたのに、この矛盾に困惑する。

——その瞳は、俺を長い時間その場に縛り付けていた。

7.

「あれ、ハル」

ブラブラと歩いていたら、通りすがりに声を掛けられた。振り返るとガードレールに寄りかかって女に囲まれている茶髪がこっちに片手を上げている。

「都己」

「つまんなそうな顔。どうした？」

…人の素の顔捕まえて、つまんなそうって。

都己は立ち上がると女に愛想を振りながら輪を抜け出して来る。

「都己いい、その人よく一緒にいるよね？」

「ハルだよ。紹介してよー」

都己の袖を掴んで女達は姦しい。

…俺の名前は知ってるみたいだけど、俺は知らない顔だ。

不意に葵に言われた事を思い出す。

本当に一方的に知られてるのか。そんなに気分のいいものじゃないけど。

少しムツとしたのに気付いたのか、都己は俺をちらりと見て苦笑し、女達に手をひらひら振る。

「ごめんなー。また今度」

「都己いい」

「行こ、ハル」

ぽんと肩を押されて歩き出す。

鼻歌まじりに歩く都己は、振り返りもしない。

まあ、囲まれてる事なんて珍しくないけど。

「いいのか？ あれ」

「んー？ ファンサービスつつうか。別に付き合いがある訳じゃないし」

「追っかけな訳ね」

「貴重なね。一応大切にしないと」

DJとして地元では結構知られている都己は、地道に活動を広げているらしい。

生憎、俺はその情報に疎いんだけど。

「ハル、この後暇？」

「少し飲んだら帰ろうかと思ってる程度」

「俺、後輩と飲むんで待ち合わせしてるんだけど来るか？ 多分お前の好きなタイプ」

「…女ならパス」

「何、女断ち？」

きょとんとした顔で見られて顔を顰めてしまう。俺を何だと思ってるんだ。

…まあ、実際そう思われてもしようがない。

この間葵と会ってから、女に色目で見られる事が極端に面倒になってるのは確かだ。

俺が答えないのをどう取ったのか、都己はくつくつと笑った。

「可愛い顔はしてるけど、男だよ。今日は彼女も連れて来ない筈だ」
「へえ」

行くとも行かないとも云わないうちに、店についてしまったらしい。都已はカントリーっぽい扉の前で立ち止まる。いつも樹や裕也達と飲む店の丁度裏側。イタメシ屋だった。

「俺、メシ食ったよ」

「ばっか。こういうトコはつまみも美味いんだよ」

店はこじんまりとした雰囲気で、少しだけ和む。

都已は顔なじみらしい店員に手を挙げると示されたテーブルに向かう。

「透さん？」

テーブルに座っていた男の顔に声を上げた俺を、都已が振り返る。4人掛けのテーブルに座っていたのは、小柄な、相変わらず綿菓子みたいな笑顔だった。

「何、お前ら知り合い？」

「都已の後輩って」

：まさか、都已、和人とも知り合いとか云わないだろうな。
世間の狭さに慄いていると、透さんは困ったように笑った。

「この前、葵が世話になって知り合ったんですよ。都已さんこそ」

「前に話したろ。変わったツレがいるって」

「：都已、変わったって」

「ハル、そこに突っ込むな。まず座れ、なっ」

椅子に押し込まれて、都己が座るのにこちらから視線を外した隙に透さんと目を合わせる。

今の会話で、二人の關係に和人が絡んでいない事が俺に分かったように、透さんにも俺が『ハル』としてここにいる事が伝わったようだ。察しがよくて助かる。

「高校の後輩なんだ。自己紹介は知らないな？」

都己は機嫌よく注文を済ませると、にこにこ俺達を見た。

「知らない。…でも驚いた。そっか、透さん、都己より年下なんだ」

「二年後輩だよ」

「見えない。って云うか、都己より落ち着きあるんじゃないの」

軽く頭に平手が飛んでくるが、いや、都己に落ち着きがないのか。と続けてやる。

「こいつは昔からこうなの。顔と雰囲気ギャップ萌えて…っ」

今度は都己の顔をおしぼりが襲った。透さん、ナイスコントロール。

「容赦ねえなあ。ハル、こいつの見た目に騙されるなよ。武勇伝ならいくらでも」

「都己さん」

はは。都己が負けてる。

やっぱり只者じゃないな、透さん。

家庭料理みたいなのをつまみに酒もどんどん進む。

最初は遠慮がちだったが、透さんも俺があまり酔わない事が分かったらしく肩の力が抜けていくのがわかる。

だよな。俺の年齢を知っていれば、心配していたのかもしれない。

「そう云や、ハルと葵ちゃんがどうしたって？」

思い出したように都己が云う。

ああそうか。パーティーの時の話は知っていても、相手が葵だったって事は知らないんだった。

「都己のパーティーの時、俺先に抜けたろ」

都己は少し考えて、ああっと声を上げた。

「あれ、葵ちゃんか」

「…不本意ながら」

無然とした透さんとは対照的に、都己は大笑いしている。

「なるほどねえ、相変わらずだな、お前の彼女」

「相変わらずって…やっぱ、よくあるんだ」

「あるもないも、なあ」

都己に振られた透さんは溜め息をつく。

「気が強くてね」

「ま、あの見た目じゃやっかみも多いだろうし？　しょうがないんじゃないの？」

「そんなに敵を作る性格でもないんですけどねえ」

保護者然とした云い方に笑いが浮かぶ。
確かに、人懐っこいよな。

「でも、あれ危ないんじゃないかなあ」

いい機会だ。俺は気になっていた事を切り出した。

「あの男、ファンじゃないと思いますよ。マジで殴ろうとしてた。
止める時結構力込めましたから、俺」

「…ストーカー男？」

笑いを収めた都己が首を傾げる。都己も知っている話なら、話が早い。遠慮しないでいいだろう。

「可愛さ余ってって奴じゃなくて？」

「実際酒被ったのは俺だよ。頭に血い昇らせ過ぎでしょ。…まあ、
誘いをかけてあわよくばってのはあるかも知れないけど、葵さんは
そういうタイプでもないし」

ああ、透さんに敬語、都己にタメ語を使い分けるのが面倒になっ
てきた。勝手に透さんにも似たような話し方をする事にする。今は
『ハル』だし、いいだろ。

「ファンの付きまといじゃなかったら、なんだろうね？　くっさい気
がしない？」

ふと、都己の視線に気付く。何だよ。

「…ハルがそんなに人の事気にしてるの、俺初めて見たわ」

「なっ」

不意打ちだ。かっとなりに血が上る。

「透、すごい事だぞ、これ。うわー、樹と裕也にも見せてやりてえ」
「都已っ」

「だって、お前がだよ？ 何、そんなに気に入った？」

都已のこめかみに拳を押し付けると、奴の口はやっと止まった。

「俺はどんだけ冷血人間なんだよ」

「いつも興味薄そうだからさ、何にでも」

「んな事ないだろ」

「いや、ある。俺にもその熱意を注いでほしい」

「だからっ」

ぎゅうっとか抱き締められて、都已の顔を力ずくで押し退けると、テーブルの向かいからくすくすと笑い声が聞こえる。…透さん、そんな涙目で笑わなくても。

「いや、俺も見せてやりたいなって」

都已は分からない顔をしたけれど、俺には分かった。和人について聞こえた気がした。

答える事は出来ないけれど、ありがとうと目線に乗せると、透さんは分かっていると云うように笑み返してくれた。

「で。あれは葵さん危ないと思うんだけど、放置してるわけ？」

踏み込み過ぎか。そう思わない事もないが、一応助けた身として

は気になる訳で。

「…大元を何とかしようとは思ってるんだけどねえ」

「大元？」

透さんが頬杖をついて、ぼそりと云った言葉に問い返す。

「何せ、葵が何も教えないから何とも。多分、そんなえげつない嫌がらせを指示する人間は、葵の周りに一人しかいないんだよね」

苦虫を噛み潰したような顔。手が出せない相手なのか？

「葵のモデル事務所で、厄介な女が一人」

「お前が振った女か」

…だから、都己。なんでそう一足飛びに云うか。俺にはちっとも分からない。

「あれはしょうがないでしょ。好みじゃないんですから」

「まあなあ」

二人で溜め息を付き合っている。

どういう事かと問い質すと、つまり、仕事でも男でも負けた女が逆恨みしていると。

「社長にも気をつけてくれるようには頼んであるんだけどね。葵にデカイ仕事振っても彼女には振れない。これはビジネスだと云われてしまうとそれ以上は云えないから」

ビルのウィンドウで見た写真。あれほど鮮烈な印象を受けるモデ

ルの葵は、やはりすごいのか。

「細々とした嫌がらせは流してるみたいなんだけど、それでヘビ女が痺れを切らしたのか」

透さんの口からヘビ女って。：一体どんな女に妬まれてるんだ、葵。

「さすがに彼女をクビにしろとは云えないから。いくら俺でもそこまで口を出したら、縁を切られる」

「縁？」

「あ、葵の事務所の社長、俺の叔母さん」

「バイトに入って、商品に手を出したんだ。こいつは」

「都已さん、人間き悪いです」

なるほど。そこが出会いで、しかも厄介なまで拾ったという事か。

解決策なんて出るはずもなく、葵を一人で歩かせる事だけはしないという透さんに俺も協力を申し出て、今夜はお開きにする。

男が原因であれば力で解決も出来るんだろうが、女じゃそうもいかない。男を使ってまでの陰湿さにうんざりするが、葵を守る事が優先だ。

：都已に云われた事を思い出して、苦笑が漏れる。

確かに、今まで他人の事を本気で心配した事なんかなかった気がする。

浅い付き合いにそんなもの必要がなかった。

気懸かりとは別に、何か心に埋まり込んだものが出来た気がして、そんな場合じゃないと思いつつ、口許が緩むのを止められなかった。

8.

「葵さん、携帯持ってないの？」

「うん。電話嫌い」

「嫌いって：仕事でも使うだろ。メールとか」

「皆、私が持ってないって知ってるから平気」

何なんだ、この時代錯誤な頑なさは。

『bear's bar』のカウンターで、葵と並んでいる。

出会った日の翌日から、週に二、三回は会っている。

雪乃さんの云った通り、二人がここに来るのは今まで俺が現れていた時間より二時間は早かった。

自然と俺はまずここに顔を出して、二人が来るだろう時間までは居座る事が多くなった。

透さんと俺の意思の疎通が出来た事もあり、待ち合わせは大体この店にする事にしたらしい。

和人や透さんが迎えに来れば俺はその後街へ遊びに出るし、ここで一緒に飲む事もある。

二人とも彼女達を一人で帰す事はしないようにしていたから、どうしても都合が合わない時には代わりに俺が送って行く事もあった。

邪魔になりそうな雰囲気があればすぐ姿を消そうとしていたんだが、そういう時は大抵強引に引き止められる。四人共、完全に俺を弟扱いしてくれるおかげで、俺は居心地のいい場所が増えた事に充足感を覚える。

これも、和人の狙いだったのかもしれない。

あいつは、いつも俺に足りないものを上手に与えてくれるから。

「けどさ、ストーリーカーの事もあんじゃん。絶対持った方がいいって透さんも云わない？」

「…諦めたみたい」

「強情なんだ」

少し拗ねたような顔の葵に呆れつつ、俺はカウンターの隅にあった店の名刺に手を伸ばす。

体を乗り出してカウンターの中からペンを取ると、名刺の裏に数字を走らせた。

「俺の番号。別に使わなくてもいいから持ってた」

名刺を押し付けると、葵は戸惑ったようにこちらを窺う。

「透さんと兄貴の後でいいから。困った時、二人に繋がらなかったらかけて」

「うん、ありがとう…」

電話をくれれば嬉しいが、して来ないのが前提だ。…この姉さんの事だから、いつヤバい目に合うかも分からない。学校やその他の拘束時間で考えても、和人や透さんよりは俺の方が電話は繋がりやすいだろうから保険にはなるだろう。

素直に受け取ってもらえて安心したところで立ち上がる。そろそろ送らないとな。

葵はモデルの仕事で遅くなった時は、いつも透さんと待ち合わせをしている。今日は透さんの都合がつかないので、俺が代役だ。

「ほら、行こう」

二人分の金をカウンターに置いて葵の腕を引く。

「おっさん、また来る」

「おう。送り狼になるなよ」

「そんな度胸ないよ」

おっさんと軽口を叩き合っていると、葵が財布を握り締めて入り口に追いついて来る。

「私の分」

「いらない。兄貴とか透さんが一緒の時、俺払った事ないだろ。内緒で返させといてよ」

「直接返せばいいじゃない」

「あの人達が受け取る訳ないでしょ」

既に一度払おうとして叱られ済みだ。にっと笑うと葵は財布を引っ込めた。

「いい弟くんだわ」

「愛されて育ったからね」

「ああ、カズは溺愛してるよね」

「上の兄貴も相当だよ。二人のおかげで、俺は生きてるんだから」

エレベーターに乗り込むと、葵は首を傾げた。意味が取れなかったらしい。

「俺が籠に閉じ込められて壊れそうだった時にさ、自由に自分がやりたい事が考えられる場所に連れ出してくれた」

街に出る事がなかったら、俺がどうなっていたか考えただけでぞつとする。

「ウチって特殊だね。：俺が『ハル』でいられるのは、兄貴達のおかげ」

ビルを出ると少し肌寒い。もうすぐ冬が来るって風が吹いている。葵と透さんの住むマンションは、タクシーを使ってもいいが歩けない距離じゃない。

タクシー乗り場を通り過ぎたところを見ると、葵は歩きたいらしい。

「俺の事、和人に聞いてる？」

「ちょっとだけ」

葵は云い辛そうに前を見ている。

俺が『ハル』である理由を説明するには、家の事情は外せない。常識で中坊がする事とか離れている事は分かっている。和人は、三人には話していると思っていた。

「ただ、お父さんが貴方を失いたくなくて、方法を間違ったって」「うん。：俺と母さんは、違うのにね」「まだ、お父さんはハルを避けてる？」「いや。時々帰ってくると話しかけてくれる。まだ目は見てもらえないけど」

母さんと同じ色の瞳は、どうしても見てもらえない。

それでも、父さんが一生懸命俺に近寄って来ようとしているのは感じている。

「…早く、普通に一緒にいられるようになるといいね」

葵が、柔らかい表情で云う。

俺は一瞬その表情に見惚れた。

「葵ちゃん？」

突然立ち止まった葵の前に、女が立っていた。

美人：キツそうな顔立ちに、化粧が濃い。

少しだけ気持ちのいい空間を壊されて、俺はむっとしながらその女と葵を見比べる。

葵の顔は無表情になっていた。…友達、ではないのか？

「響子さん」

「こんな処で会うなんて珍しいわね」

じろじろと俺を見る女の視線は不快だった。値踏みされているような気分になる。

「葵さん、知り合い？」

「うん…同じ事務所の人」

「ふうん」

モデルか。そう云われれば、なるほど云う雰囲気だ。

別に興味がある訳でもないので、葵の様子を見ていて気付く。…へび女か。

「あなた、『ハル』ね」

俺を、と云うか『ハル』を知っているらしい。ねっとりとした視線で葵を通り過ぎて俺に近付いて来る。

葵は無視かよ。もう、これは、ヘビ女に決定だろう。

「この子、男がいるのよ。放つといって私と飲みに行かない？」

あまりに直接的で笑えた。顔は近すぎるし、指はもう俺の胸を触っている。

どれだけ自信があるのかは知らないが、生憎ヘビは好きじゃない。

「悪いけど、今は葵さんと一緒にいたいのでお断りだね」

「この後の話よ」

：色仕掛けされても、食指は動きませんが。なるほど、透さんと都己の会話に今更のように納得する。これじゃあ、透さんだって引いただろう。

挑発するような視線に「悪いけど」と肩を竦める。

「あれ、ハル？」

諦めの悪いヘビ女の指を自分の手から外していると、また声が掛かる。

今度は誰だ。

振り返ると見知った顔が三つ。一番端の都己が、眉を顰めている。

「よう」

「珍しいー。揉め事？」

樹がにこにここと云う。本当に揉めてたら違和感ありすぎだろう、その口調は。

「響子」

都己の鋭い声に、ヘビ女が肩を揺らす。ああ、そうだ。響子だっけ。先刻葵もそう呼んでいた。

「今度はハルを使うか？」

都己の声も厳しいが、見返した響子の目つきも相当だ。

「いい加減にしろ」

「悪いけど、俺は葵さんを守る側だから」

何かしたら容赦しないよ？ 耳元で囁いてやる。どんな顔をするかなんて興味はない。そのまま響子の横を通って少し離れていた葵に手を伸ばす。

「友達紹介していい？ 都己は知ってるよね」

安心して欲しくて出来るだけ優しく笑いながら小声で効くと、葵は小さく笑った。

「樹と裕也だよ。これ、葵さん」

「よ、葵ちゃん。久しぶり」

葵は都己に頷き、樹と裕也に向かって「こんばんは」と微笑んだ。

「あれ、君」

「あー、あの時の彼女」

「ああっ、あの時は有難うございましたっ」

裕也と樹は覚えていたらしい。葵も思い出したのか引き攣りながらお辞儀をしている。

「さっすがハル。しっかりお知り合いになっちゃったんだ」

「人聞き悪っ、偶然だよ偶然」

人の話を聞かずに葵を囲む連中から視線を動かすと、響子が遠ざかって行くのが見えた。

肩を怒らせて、すごい勢いで歩いて行く。

ちらりと都己を見ると目が合ったので、どう思う？という意味を込めて眉を上げて見せる。返ってきたのは、やれやれと言いた気に肩を竦める仕草だった。

「ハル、後で来るだろ？」

裕也の声に意識を戻すと、葵を目線で指している。

ああ、気を利かすか迷っているのか。

「葵さんを送ったら行くよ。後でね」

葵の背中をやんわりと押して歩き出す。

最近はおっさんの店の後、よくこいつらと会っている。今日も同じ店だろう。

「葵ちゃん、またな」

「ハルをよろしく」

「今度一緒においで」

好きに葵に愛想を振っている連中にひらひらと手を振ると、にこ

にこ手を振っている葵を促す。

「ごめんね。馴れ馴れしくて」

「ううん。仲いいんだ？」

「まあ、ね」

仲はいい。それは間違いない。

葵は、俺のすっきりしない応えに少しだけ笑いを納めた。

「…友達だけど、『ハル』として？」

鋭い。俺は『ハル』としての面しかやつらに見せていない。
当たり障りのない遊び相手ならよかったけれど、さすがに二年つ
るんでいると少し苦く感じ出している。それでも。

「云えないよ、今更」

葵は困ったように微笑んだが、何も云わなかった。

9.

日曜日だというのに朝から目が覚めてしまった。

昨夜は父親が帰って来たから、外出はなし。とっとと寝た弊害だ。

普通なら、日曜日には何をしようか、とか考えるんだろう。

学園で耳に入ってくる会話からも、日曜日は出掛けるものだという事は知っている。

だが、俺には父親や屋敷で働く連中が動いている時間に外出するなんて選択権はない。

街には慣れたが、それはあくまで夜だけの話だ。

バルコニーから見える空は晴れ渡っている。

読みかけのハードカバーを持って部屋を出ると、通りかかったメイドがにこやかに笑いかけて来た。

「遙人様、おはようございます。随分早いですね」

「おはよう、葉子さん。目が覚めちゃった」

将人と同じくらいの年だっただろうか。

ブルーグレーの地味なワンピースにエプロン。親戚の家では着物で働かせている所もあるって話だが、いっそ私服にしてやりやあいいのに。男の黒いスーツも見飽きたが、このワンピースもどうかと思う。

まあ、テレビでよく見るメイド服よりは、まだマシだけだな。

前に葉子さんに云ったら、私服だと着る物に迷うから制服は大助かりだと笑い飛ばされたっけ。

「朝食になさいますか？ 皆様、まだ起きていらっしやっていないようですけど」

「いや、一緒にいいよ。テラスにいるから、飲み物をくれる？」

「すぐお持ちしますね」

葉子さんと別れて二階のテラスへと向かう。

一階の庭に面したウッドテラスの方が開放的なんだけど、さすがに十一月に入って朝から外で本を読むのはキツイ。

ここなら壁一面と天井の大部分がガラスになっているので、温かいまま日光浴が出来る。

無駄に広い空間にはいくつものデカイ観葉植物に囲まれるようにソファが置いてあって、ちょっとした森林浴気分になれる。

「よう、早いな」

誰もいないだろうと思っていた俺を出迎えたのは、将人だった。その服装は昨夜と変わっていない。寝てないのか？

「おはよう。…ひどい顔だよ」

隈こそ出来ていないが、目が充血しているし髭も半端に伸びている。

身だしなみには気を遣う将人にしては珍しい。

いつからここにいるんだか。

「そうか？」

「うん」

トレイを運んで来た葉子さんがそのまま部屋を通り過ぎて行くのが見えた。将人がいるのに気付いて、カップを取りに行ったんだろ

う。

「寝てないんだ？」

「まあな」

昨夜、食事の後父さんの部屋に籠ってたよな。何かあったのか？
聞いても教えてはくれないだろうから、そのまま会話を終了して
ソファに体を沈める。クッションを枕にして寝そべると読書には丁
度いいんだ。

葉子さんが入って来て紅茶を二人分注いで出て行った後、将人は
ゆっくりと息をついた。

「遥人」

眉間を摘むように揉みながら、将人は言葉を探すように間を置い
た。

「…何？」

問い返すけれど、将人はすぐには言葉が続けない。

本当に珍しい。こんな様子を見るのは初めてかもしれない。

「もうすぐ、外へ出るようになって三年だな」

「うん。将兄と和兄には感謝してる」

「楽しいか？」

「最初は大変だったけどね」

何しろ、俺はこの屋敷の中しか知らない子どもだったのだ。

学園には通っていたし、家に客が来る事もあったから人と会話を
らしいは出来たが、友達なんていなかったし。

基本的なところでは、金の扱い方すら知らなかった。

よく芸能人とかが云う、「電車の切符の買い方が分からない」なんて可愛いもんだ。

「お前、変わったよな」

「おかげ様で。色んな経験をさせてもらったよ」

男だけでつるんだり、女と遊んだり、喧嘩だって大小合わせて結構やった。

夜の街には色んなものが転がっている。

兄貴達やおっさんが遮ったりしないであてくれたから、俺はこの短期間で砂が水を吸うみたいに成長した。人間になったのだと思う。：それがいい変化だと自分では思っているのだけれど、実際年相応なのか甚だ疑問だ。

「そうだな。あのままだったらお前は一生この家で、自分で選ぶ事も出来ずにいるしかなかった。だから俺達は、お前を連れ出した」

確かにそうだろう。

何不自由なく与えられる物の中に居続ける事は難しくない。

——そこから抜け出そうと考える事は、ひどく難しいだろうが。

「本当の事を云うと、お前の為だけにやった事じゃない」

少し低くなった将人の声に、俺は本を置く。

「俺も和人も、このままだと親父がお前に与えないだろう選択権を与えたかった」

選択権。

何の事かは聞かなくても知っていた。

御堂の血縁が、皆大人になる前に迫られる選択。

会社に入り、『御堂』の一員として生きるか。仕事には一切関わらず、御堂の一縁者として生きるか。

『御堂』に縁故としての甘さはない。能力・努力がなければ切り捨てられる。だからこそ、早いうちに『御堂』に入ると決めたならそれなりの教育を受け、会社の底辺に放り込まれるのだ。

そうして周囲が認めてのし上った者だけが『御堂』の重役となる。実際、親戚でも重役席に座っている者は多くない。

もしただの縁者となる道を選んだなら、もちろん以後『御堂』の恩恵は受けられない。親戚同士の集りに参加する事くらいは出来るが、大抵は自分の家族にしか連絡を取らなくなるらしい。

勿論、自分が『御堂』に入りたいと望んでも切り落とされていく場合もある。だからこそ、自分で選ぶ。これは『御堂』創設からの仕来りらしく、御堂に生まれた者は子どもの頃からその理不尽さや厳しさを目の当たりにし、それが当然なのだと感じるように育てられる。

とは云え、現在の社長である父さんが俺に対してその教えをしてきていないのも確かだ。

十二歳まで外の世界を知らなかった俺には、選ぶ事が出来る筈がない。

『御堂』で生きる事も、外で生きる事も出来ない。それが、あのまま外に出ていなかったとしたらどうなったかという想像の結末だ。

「俺は、お前が生まれた時に決めた。…まあ、親父はその前から決めていたらしいけどな」

将人は小学部に上がる前から、厳しく教育されていたと聞いている。父さんの期待は相当デカかったらしい。

「…親父を見てて、『御堂』と家族を守る事は当然だと知っていたからな。親父の片腕になって、それを手助けする事が俺の夢だった」

俺の知らない父さん。それを将人から効くのは嫌いじゃない。

あの人が俺の事を嫌っているのではないと、再確認が出来るから。

「和人も随分前に決めた。『御堂』には入らないと」

和人は大学院で地質学の研究をしている。教授から海外での調査を任せたいとも云われているらしいが、今は断っている。

多分、大学院の後はそのまま大学に残るか調査隊に入るのだろう。

もう『御堂』と縁を切ってもいいと云う和人が未だこの屋敷にいる理由は、多分、俺だ。

俺に色んなものを与える為に、和人はここにいる。

「…俺は、お前と和人、どちらにも自分の為に生きて欲しい」

「俺が選んだら、和兄は自由になれるかな」

将人は俺をじっと見ている。

将人は言わないだろう。和人が囚われているのが、不遇な弟の俺だとは。

——俺は、選べるのだろうか。今ここでは、とてもではないが答えは出ない。

「もう少し、時間をやりたかったんだけどな」

ふう、と息をついて将人は弱く笑った。

時間をもらったところで、楽しく街で過ごす俺は自分で選び出す事はしなかったに違いない。こうして、提起されるまでは。

「将兄、和兄の彼女知ってる？」

「ああ」

もう紹介済みなんだろう。ほんの少し話すか迷った俺が莫迦みたいに思える程、将人は当然のように頷いた。

「雪乃さんだろう？」

「うん。俺さ、雪乃さんと一緒に和兄を見て、初めて和兄が『御堂』から離れた方が幸せなんじゃないかって思ったんだ」

普段俺達の前にいる和兄が不幸そうな訳じゃない。でも、外で雪乃さんや透さん、葵と一緒にいる和兄は、俺達の前とは違う穏やかさがあつた。

まるで、俺が覚えていない母さんが生きていた頃の話聞いた時のように、幸せという言葉が浮かぶ。

「…俺、将兄にも和兄にもたくさん色んなものを貰った。今、俺が俺でいるのは二人のおかげだと思ってる。これから先、二人の為になるとしたら俺は何を選べばいいんだろう」

答えを求めるものではないと分かっているのだろう、将人の表情は動かない。

独り言のように呟いたそれに後悔して顔を顰めると、大きな手の甲で頬を撫でられた。

「俺達はお前がやりたいようにやるのが、それを見つけてくれるのが一番嬉しいんだ。俺達の為だなんて云うな」

「俺がやりたいように…」

俺は、どうしたいんだろう。

街に出てから、俺は沢山のことを自分で決めてきた。自分の意思と云うものを見つける事が出来るようになった。

でも、見えない。

『御堂』を選んだら、『御堂』を選ばなかったら。シュミレーシヨンは出来ても、自分がどうしたいのかは分からなかった。

「キツイよな。すまん」

ぽん、と頭に手が乗せられた。

いつの間にか立ち上がった将人に見下ろされている。

「ま、すぐに答えが出せるような話じゃない事は分かってるからな」
「うん。考えるよ」

少し笑ってから、一つだけ確かめたくなった。

「…俺、例えば『御堂』を選んだとして、努力すれば役に立てるようになると思う？」

俺の甘ったれた質問に、将人は苦笑で返した。

「…俺達兄弟はそっくりだって昔から云われている。一番似ているのは、ガキの頃からの賢さだよ」

『御堂』を選んだ将人と『御堂』以外の道を選んだ和人。どちら

の可能性も俺にはあると云いたいのだろう。

俺は、その答えを出すために籠から出たのだと、今、初めて感じた。

「ハル、何かテンション低い」

ぼんやりとグラスの水が溶けるのを眺めていた俺は、作ったような高い甘えた声で意識を現実に取り戻された。二の腕にしがみつく女が、頬を膨らませて見上げている。

…名前、なんだっけな。

どうしても思い出せない。ひょっとしたら聞いていないかもしれないが。

押し付けられた胸は、強調するように開けられたシャツの胸元からはみ出しかかっている。

「そう？」

我ながらすごい愛想笑いだ。

それでも女は頬を染めているから、まあいいか。

「ねえ、ダーツしよ」

上目遣いで強請られても、そんな気分じゃない。

元々『bear's bar』に顔を出してそのまま帰ろうとしていた所であたり会った樹にこの店に引きずり込まれたんだ。テンションが上がりにくくなってるのは自覚している。もともと、そんな顔をしていたからこそ、樹は俺を放置しなかったんだろうってのも分かっている。

…店に入ってから放置されてるけど。おかげで、自分から寄っ

て来た女はリップサービスなしの俺に不満なようだ。

もう、放つといてくれないだろうか。

やんわりと腕を解くと、彼女の連れだった筈のテーブルを指差す。

「友達放つというて平気？」

「大丈夫。それより、ねえハルウ」

顔が近い。頂いてしまうのが礼儀なのかもしれないけれど、今日の俺は据え膳を喰う気がないんだって。

「ごめん。静かに飲みたい気分なんだ」

下着スレスレまで上がっているスカートから伸びた太腿に手を添えると、彼女は甘えるような声を漏らした。

擦りもしていないのに、彼女の目的が見えすぎて逆に萎える。

「ごめんね」と耳元で囁くと、更に頬を染めて呆けてしまった。

恥をかかせるのは申し訳ないが、ここまでアピールを続けて俺が乗っていないんだから今更だろう。

目をトロンとさせた女を置いてカウンターに移ると、すぐに裕也が寄って来た。

…見てたな、こいつ。

「来る者拒まずのハルが珍しいな」

「うるさい。ダーツしてろよ」

店の奥では樹と都己が常連達とゲームで盛り上がっている。

裕也の前にグラスが移動して来た。裕也達と飲む時は大抵この店なので、すっかり顔馴染みになった店員が気を利かせたらしい。

グラスを掲げてにやりと笑う裕也の顔が憎たらしい。

「何かあったか？」

珍しい問いに一瞬目が点になる。

いや、心配されるのは嫌じゃないんだけど、いつもなら深入りしないこいつがわざわざ探る程俺の様子はおかしいのか。

「んー。人生の岐路についてちょっと」

「岐路ねえ」

煙草に火をつけた裕也はこっちを見ない。

どうでもよさ気な口調が、俺の口を滑らかにした。

「裕也さあ、今の職って決めたのいつ？」

裕也は美容師だ。見た目も手伝ってはいるだろうが腕もいいそう
で結構評判がいい。予約が取れないと女がぼやいているのを聞いた
事がある。

「俺？ ガキの頃から姉貴と妹の髪をいじらされてたからなあ。気
付いたら何となくそうなるだろうと思ってたかな。専門学校受ける
のも全然迷わなかったし」

「だよなあ。環境でそう意識の中に入ってくるよな、なりたい職業
って」

「そんなんばっかじゃないと思うけど？」

環境が、俺に迷えと云っている場合はどうしたらいいんだ。

大体、ついこの間まで俺は自分の時間が流れている事にすら気付
いていなかった。前の事も先も事も考えた事なんてなかった。

「：一度きりの選択で、答えが出ない二択があるとする。裕也ならどうする？」

曖昧もいいところの質問だ。こんなの聞かれても困るか。
裕也を見ると、意外にも真剣に考えている。

「リテイクなし？」

「なし。一生に一度きり」

「：答えが出るまで待つ、かな」

こちらを見て、軽く眉を上げる。

「案外、そういう迷ってるものって自分の中では答えが出ているものじゃないか？ きっかけがあれば簡単に見つかるよ」

「——そうなのか？」

「焦ると間違うぞ：と俺は思ってる」

きっかけか。

随分楽観的な意見だが、何もないところから探すよりは、まだ見えていないところで俺自身が既に出している答えを探すと思った方が分かりやすい気がする。

「なるほど。：年の功ってすごいな」

感心したのを半分隠しながら云うと、裕也は俺の頭を小突いた。

「時期的に進路に迷うには遅いんじゃないの？」

もう十二月になろうとしている。まあ年は分からなくても、どの段階の進路にしたって年末にうろうろする悩みじゃないよな。

「いや、学校とかの進路じゃないんだ」
「へえ」

軽い返事はそれ以上追及してこない。それが、有難かった。

もう少し時間をやりたかったと将人が云った理由はすぐに分かった。

最近将人や和人が父さんの部屋で、長い時間話をしていた訳も。

夜半に帰った俺に、部屋で待ち受けていた和人は静かに云った。

「御堂を出るよ」

正直、いつかは来るだろうと思っていたので驚いた顔はしない。
だが、続く言葉は予想外だった。

「雪乃と籍を入れた」

これは驚かない筈がない。

入れる、じゃなくて入れたって云ったよな、今。

「云わなくて悪かった。本当は夏に入れる前に話そうとしたんだけど」

タイミングを逃したと和人は云った。

思い当たる節は…あれか？ 一度、俺が先に帰ろうとした時に和人と雪乃さんが二人揃って焦っていた事があった。って、あの時俺と雪乃さんは初対面じゃないか。わざと会えるように仕組んでたのか？

「…びっくりした。いや、おめでと」

間抜けになってしまったけれど、雪乃さんが義姉になるのは嬉しい。

でも、その外したタイミングから何ヶ月も経っているじゃないか。そこを突っ込むが、和人は言い訳もせずに俺の顔を見据える。

「遥人、一緒に来るか？」

「…嫁に？」

いや、悪かった。ボケてる場合じゃない。でも、他にどう返せて云うんだ。

和人は俺の額をペチッと手の平で叩くと、苦笑して見せた。

「俺はね、遥人はこの家から離れた方がいいとずっと思ってた。親父の気持ちは分かるけど、俺にはお前を殺すようなやり方が許せない」

詰るような口調。父さんに対して、和人のこんな言葉を聞いたのは初めてだ。

「…そんなに驚くなよ。お前、自分に怒る権利があるのにも気付いてないだろう」

「俺に、父さんがどんな人か教えたのは和兄だろ」

声が不安定に裏返る。

いつだって柔らかく笑って父さんを擁護していたのは和人だ。それに将人も。

だからこそ、俺の中に父さんに対する不満や憎しみは生まれなかった。

俺の世界は二人で出来ているのに、それを否定されて混乱するなと云う方が無理だ。

「嘘は云ってない。最近、親父は少し変わってきただろう？ あの人なりにこのままじゃマズいと思ってはいたらしい。将人がお前を外に出している事を云ったら、すごい取り乱していたけどね？」

「話したの？」

「敏郎さんは元々親父の信用が篤いんだ。だから協力してもらったんだよ」

おっさんの名前が出てきてまた分からなくなる。

どうなってるんだ？

「来年には子どもが生まれる。俺はここじゃない家族をつくるよ」

「子…っ」

びっくりなんてもんじゃない。いや、既に結婚しているって云うのなら、別におかしくはないよな？

「遙人の子どもの頃の話をする度に、雪乃も早く欲しがっていたしね。…なんか、こんな話照れるな」

「いや、照れてる場合じゃないし」

思わず突っ込んだけど、照れ隠しに顔を顰める和人は嬉しそうだ。

「――ごめんな、遙人。俺は将人みたいにのんびり見守っていられなかった。お前が選択を迫られる時には、この家以外の居場所を用意するつもりでいた。：俺がここを捨てるタイミングに、無理矢理お前を合わせさせたようなものなんだ」

「な…んで」

声が掠れる。何で、そこまで俺にするんだ。

俺は、他の家庭なんか知らない。兄弟が、普通どんなものなんかなんて知らない。

それでも、俺の事に拘り続けている和人や将人の気持ちが分からない。

「ごめん」

俺が責めていると思ったのか、和人は俯いている。

違う。俺には、責める権利なんてない。

「雪乃さんを幸せにする事だけを考えていればいいじゃないか。和兄が、俺を背負う事なんて、ない」

びっくりと和人の肩が揺れる。一瞬おいて上げられた顔は、少しだけ歪んでいた。

「将人にここを捨てるって言ったら、あいつ何を云い出したと思う？」

「え…何」

「御堂の姓を捨てない事、自分が生活の援助をする事。それを受け入れられるなら、出て行くなり遙人を連れて行くなり好きにしろだつてさ」

歪んだ顔は笑っているらしい。泣きそうにも見える。

「おかげで、生まれて初めてじゃないかと思う程遣り合ったよ。ガキの頃だってあんなに云い合いをした事なんてなかったってのに」
「け、喧嘩？」

二人が云い合う姿すら見た事ないぞ、俺。

「：『お前の子どもが成長した時の選択権をお前が潰すな』って云われたよ。『御堂が役に立つ時が来るかもしれないし、御堂に入る事が最善の道になる子どもが出来るかもしれない。俺がいつか社長になるのは、そういう時の為でもあるんだ』って吼えられた」

俺と和人、どちらにも自分の為に生きて欲しいと云った時の将人の顔が浮かぶ。

じゃあ、将人は？ 将人は自分の為に生きているのだろうか。

「嫌になっちゃうだろ？ 今更そんなデカイ愛情ぶちかますなって思ってたよ」

「和兄：」

和人は滑りの良さそうな栗色の髪をかき回す。苦い顔をしたって、それこそ今更だ。

「要するにさ、将人はお前も俺も守ろうとしてる。生かそうとしてくれてるんだ。同じだよ。俺はお前を守る。：お前が外に出たいなら、俺がいる。俺が出来ない部分は将人がいる。親父も、お前が自分で選ぶ事なら受け入れる」

最後の言葉に、俺は固まる。

父さんは、与えるものじゃない道でも許してくれるのだろうか？

「心配ない。俺の結婚とお前の自由。その二つのおかげで、将人が今までにないくらい親父と濃密な時間を過ごしているって知ってるか？」

「もしかして、あの寝不足顔」

「そ。説得は奴に任せておけばいい。：俺も結構同席したけど、本当に将人と仕事をしなくて良かったと思ったよ」

弁が立つなんてもんじゃない。迫力といい半端ないんだから、と和人はおどけるように笑う。

「息子にあれだけ説教じみた説得されれば軟化もするって」

：少しだけ、父さんが可哀想になったな、今。

「――ごめん。まだ、俺には選べない。俺、和兄も将兄も父さんも大事だと思ってる。自分の事だけを考えろって云われたって、分からない」

拳をぎゅっと握って言葉を搾り出した俺に、和人は柔らかく笑った。

泣きたくなる程、優しいんだ。こういう時の和人の顔は。

「待つよ。安心して迷って構わない」

おやすみ。そう呟くと、和人は俺の頬に挨拶を残して部屋を出て行った。

お膳立てされても、応えられない自分が苦しい。

甘やかされて来た結果なんだろう。俺は許されるのをいい事に甘えきってきた。猶予の時間だなんて気づかずに。

はあっと深くついた溜め息に、隣の裕也がくつくつと笑う。

「ハルってさ、軽い振りしてるけど、自分に軽くなれないんだよな」
「…意味分かんねえ」

せっかく先刻感心したんだから、妙な事を云い出さないでくれ。

「割り切れてないっての」

「どうすりゃ割り切れるんだか」

ぼやくと背中がバンと鳴る。痛え。気持ちよく叩いたな。

「その調子だとずっと考えてるだろ。思考停止っていう荒業知ってるか？」

「思考停止って…ありか？」

「あり。云ったろ、待つつて」

出ない時は出ないよ、と裕也は笑った。

「…ま、奴らも云いたい事がたんまりとあるらしいけど待ってるくらいだからさ」

ちらりと動いた視線の先には樹と都己がいる。

ああ、俺は本当に修行が足りない。見え過ぎたんだろう、俺がも

んもんとしているのが、奴らには。

こういう時、本当に早く年を取りたいと思う。完璧に自分の悩みなんて人に見せないくらいに。

「だよな」

「聞きたがらないから興味がないと思うなよ」

「…説教なら、聞くキャパがない」

わざとらしく耳を塞いで見せると、裕也はぐりぐりと拳を俺のこめかみに当てた。

「俺達は、お前を気に入ってるんだ。弱音ぐらい聞かせろ」

…分かって云ってんのか、こいつ。

いや、感じてはいるんだろうな。俺がわざと色々な事をはぐらかしてるって。

確かにこいつらは友達なんだ。少なくとも、本当の俺を隠しているのが苦しい位には。

いつか話した時に、どんな反応をされるのかは想像したくない。

このままでいられたら、そう思うのは一緒にいるのが心地いいからだ。

「俺も、好きだよ」

にっと笑うと、裕也は「そんな告白はいらん」とまた前を向いてしまった。

屋敷を出て手に入れたものはこんなにも大きい。閉じ込められたままなら、俺は家族以外を大切に思うなんて事はなかっただろう。

でも、御堂を…それ程までに俺を閉じ込めたかった父さんを捨て

るのが正しいとは、どうしても思えなかった。

11.

「ごめんごめん」

和人の入籍を知っていたんだろうと聞いた俺に対する葵の返事は、ものすごく軽かった。

おっさんもそうだったし、皆兄弟を何だと思っているんだ？

「だって、カズがすっごい切なそうな顔で、自分で云いたいって云うんだもん」

「切ないって…」

「だから、ハルは愛されてるの。知ってるでしょ、自分で」

「はいはい」

完全に子ども扱いで頭を撫でられる。

この扱いも何とかならないものか。まあ、警戒されるよりはマシなだけどさ。

「それより、透さん遅くない？ 今日迎えに来られるって云ってたんだろ？」

「ん。遅くなるかもって云ってたから。…ハルに相手してもらってるから平気って云っちゃった」

「云うなよ」

これは、警戒心ゼロだ。まあ、嬉しくないと言えば嘘になるけど。

「今日は随分ご機嫌だな」

俺の前のグラスが空になっているのに気付いたおっさんが水割り

を作りながら首を傾げる。

うん、俺も思ってた。なんか、葵はずっとにやにや機嫌がいい。

「うん」

へへっと笑う葵が云った言葉は、俺には爆弾だった。：いや、今となっては不発弾か？

「透さんにプロポーズされちゃった。卒業したら篠原になるの」

ちらりとおっさんが俺を見た。と思うのは気のせいじゃないだろう。

：いいんだよ。バカップルっぷりは見慣れている。いつそ早く片付けと思っていたくらいなんだから。

それでも、俺の前にグラスを置く前にウィスキーを足したのは、同情なんだろうな。

「そりゃ、おめでと。：まさか、葵さんまで妊娠してるとか」

「云わない。それセクハラだから」

「：スミマセン」

おめでとう、とグラスを掲げると、葵はにやけた顔でそれに応じる。

幸せそうな顔しちゃって、まあ。

「――めでたい話の後に何だけどき、ストーカーどうなった？」

婚約だなんて、そいつを逆撫でするんじゃないか？　：黒幕があの女だしたら尚更。透さんに振られた事があるって話だし。

「あの男は見なくなったよ。ハルの睨みが効いたんじゃないかなあ」
「よく云うよ」

…あの男は？
揚げ足なんて取るつもりはない。でも『は』って何だ。

「他にも何かあんの？」

「んーん」

「葵さん」

少しきつめに名前を呼ぶと、葵はついつと視線を逸らす。
隠してるのは一目瞭然だ。しかも、細かい嫌がらせの事は透さんからも聞いている。葵が話さない事も。

「葵さん」

もう一度呼ぶ。

ああもう、何でこんなに強情なんだ。全身で云いたくないって云ってやがる。

舌打ちをすると、深く溜め息をついてやる。かなり大きく。

「じゃあ、その云いたくない訳を教えてよ」

つまり話せという事なんだけど。

「…ストーカーとかとは違うの。だから、平気」

「何、嫌がらせとか？」

どうだ、凶星だろう。

「まあ、よくある話なのよ」

「嫌がらせが？」

それで済まなくなっているのが分からない訳でもあるまい。

葵にしたら事を大きくしたくはないんだろうが。

俺は、あくまで何も知らない振りを決めこむ。

「仕事の人間関係、とか？」

ぴくりと葵が頭を上げた。

「ずっと何か嫌われてたんだけど、最近ちょっと大きな仕事の話
貰っちゃってから、ちよつとね」

「許せる範囲？」

その細かい嫌がらせがどんなものかにもよるが、仕事の人間関係
に口出しをするのはちよつと迷うところだ。愚痴ならいくらでも聞
いてやれるが。

「可愛いものよ。女同士ならよくある話」

「…気を付けろよ」

女同士、で終わるならいいんだけど。

「ん。大丈夫よ」

何となく釈然としないが、これ以上は突っ込んでもしょうがなさ
そうなので諦める。

この際小出しに責めて、口を滑らせるのを期待しよう。

まったく困った姉さんだ、と溜め息をついていたら、入り口に立

つおっさんがこちらを見て誰かと話しているのが見えた。

「葵ちゃん」

葵を手招きしている。少しその声には違和感があつて、葵が反応する前におっさんという男を窺う。

：何だかカッコいいと云う言葉を勘違いしていそうな男だ。コンビニの前でしゃがみこんでいそうなタイプ。

適当に心の中で扱き下ろす。ヘラヘラしていて好きじゃない：見た事のない男だ。

「葵さん、知り合い？」

葵は首を捻っている。何だか嫌な感じがして、歩み寄る葵の後ろに俺も付いて行く。

「アンタ葵さん？ 篠原さんに頼まれたんだけど」

男は葵の手にメモを渡した。

覗き込むと、横文字と住所が走り書きしてある。

「どうしても遅くなるから、そこまで来て欲しいって」

「：なんでアンタに頼んだんだ？」

口を出した俺に男は胡散臭そうな視線を寄こしたが、葵が同調する顔をしたので文句を云うのはやめたらしい。葵に向かってにやりと笑う。

「アンタ携帯持っていないんだって？ 俺がこっちに来るって云ったら、ついでに頼むってさ」

確かに伝えたからな。そう念押しして、男は店から出て行った。

「…なんか、おかしくねえ？」

わざわざ、葵を呼びつけるなんて透さんらしくない。

「でも、これ透さんの字だよ」

もう一度覗くと、知っている店の名前だった。都己と透さんで飲んだイタメシ屋だ。

…尚更おかしい。あの店は都己達といつも行く店と同じブロックの裏側にある。あの辺は繁華街の外れで、この店の通り向かいには神社があつたりでかなり淋しい場所だ。

「俺、透さんに電話してみようか」

「ううん。多分忙しい筈だから。私、行ってみるね」

「送るよ」

「大丈夫よ」

食い下がる俺の顔を葵は覗きこむ。

「もうすぐカズと雪乃も来るんだから、ハルはきちんとお祝いの言葉でも考えておきなさい」

びしっと云われて、俺は言葉に詰まった。

結婚と妊娠の話を聞いてから、今日初めて雪乃さんに会う事になつてゐるんだ。

「雪乃、ちょっぴり不安がってるのよ。隠してるけどね。だから、

そっちが優先」

きっぱりと言い切る葵は完全に弟に云い聞かせるみたいな顔をしている。…俺が我が侘を云ってるみたいな気分になってきた。

じゃね、と頭を撫でられて、反論する気は失せてしまった。

透さんの字のメモの店はおかしな雰囲気のコじゃないし、使いの男も葵が携帯を持っていない事を知っていたんだから、それ程心配して疑ってかかる事もないのかもしれない。

俺は機嫌よく手を振って出て行く葵を、何だか靄つく腹を誤魔化しながら見送った。

12.

カウンターでぼんやりとグラスの水割りを舐める。

客はちらほらと入っていて、おっさんは別の客と喋っているので考え事には丁度いい。

：やっぱり、葵が気になる。と云うか、先刻の使いの男の目が。気に入らないだけだと云ってしまえばそれまでなんだけど。

やはり透さんに電話してみよう。

尻ポケットから携帯を取り出して透さんの番号を呼び出す。

と、同時に表示が変わった。表れたのは『篠原透』の文字。タイミングのいい事だ。

「透さん？」

ワンコールも待たせずに出た事に驚いているらしい透さんは、いつもと何も変わらない受け答えだ。

『葵いる？ もう少しかかりそうなんだけど、いつも付き合わせちゃって悪いね』

：一瞬で、血の気が下がった。

透さんはまだ何か喋っていたけれど、俺の耳には届いてこない。携帯を閉じて、おっさんを見る。

「おっさん、葵を探してくれ」

訝しげにこちらを見るおっさんに背を向けて店を飛び出し階段を

駆け下りる。

七階だがエレベーターなんて待ってられない。一階分を三步で飛び降りてビルの外へ転がり出た。

あのイタメシ屋はそう遠くない。歩けば十分：葵の足なら十五分かからないくらいか。

焦りながら街のビル配置を頭に思い浮かべつつ、裏道やビルの隙間を通って邪魔なフェンスを飛び越える。

今までも喧嘩なんかで裏道を使ったおかげで、分かりにくいビル同士の隙間なんかは大体把握している。

五分足らずで店に着くと息を静めながらドアを開ける。

家庭的な雰囲気の中の店の中には、当然葵や透さんの姿も、ましてやヤンチャじみた野郎の姿もない。

朗らかにいらっしゃいませと云われ、葵の風貌を話すがこのドアを開いていない事だけが分かった。

車通りの少ない道の向こうの神社が目についた。

街外れの神社。堀越しには木しか見えないが、林のようになっていると聞いた。祭りや正月などの行事以外は夜は無人の筈だ。

：手早く連れ込むなら、あそこか？

迷う。いや、迷っている時間はない。

おっさんなら事情は話してなくても、あの一言で察してくれただろう。そして探してくれるとしたら、街中のどこかの店に連れ込まれていないかだけはすぐに分かる筈だ。連れ込まれていたら、俺が探すより見付けるのも早いだろう。：なら、俺はこっちだ。

鳥居に向かおうとして躊躇する。人通りは少ないとは云え、表通りに近い所で何かするとも思えない。

神社の敷地を越えれば、向こう側は住宅や会社しかない。

駆け足で裏手に回って塀をよじ登る。顔だけ出すが、見える場所には誰もいない。

音を立てないように飛び降りて、気配を探る。街とは反対側に向かつて足を進める。

あまりにも静かで、心臓の音がやけに煩い。

焦るな。焦らずに、急げ。

頭の中と視線だけが忙しく動く。

間に合うか。間に合ってくれ。

待ってろ。必ず、助ける。

裡から這い上げるような叫びに歯を喰いしばった時、道から外れた奥で何かがガサリと音を立てた。

息を潜めて窺うと……いた。

葵が木を背中に座り込んでいる。囲んでいるのは、三人。

しゃがみ込んで葵に手を伸ばしている男と、後ろに立って見下ろしている二人の男。

追って来るとは思っていないのか、背後がガラ開きだ。

手を伸ばした男の手が葵に届いた瞬間、俺の頭のどこかでブチリと音がした。

迷わず飛び出して、勢い任せにしゃがんでいる男を蹴りつける。

気配に気付いたときには地面に転がっていただろう。

そのまま立っていた男二人を殴り飛ばして葵を振り返る。

服に大きな乱れはない。それだけを目で確認しながら腕を引っ張

り上げる。

「走るよ」

不意打ちは一度しか効かない。

今の内に、せめて葵だけでも人目のある場所まで逃がしたい。

葵は真っ白い顔をしていたが、俺に引き摺られるように走り出した。

背後から怒号が聞こえる。

思ったよりも回復が早い上に、声からして仲間がいたらしい。少なくとも三人の声じゃない。

三人なら撒く事が出来るかとは思ったが、甘かったか。

神社を出て通りを横切った辺りで、葵が苦しそうに喘ぐ。

全力疾走なんてそう保たない。足止めをして、その隙に逃がした方が早いかな？

「きゃああっ」

葵の体が後ろに揺らいだ。

長い髪を鷲掴みにしているのは、先刻の伝言男だった。

その腕に肘を叩き込み、葵の体を巻き取るように男から遠ざける。

男は腕を抱え込んで跪いた。筋か骨、暫く使い物にはならないだろうが折れてはいない。後ろ足で顔を蹴り飛ばして沈める。

「ハルッ」

葵の声に反応する前に、右足に衝撃が走って体が浮いた。

足を払われた。いや、スライディングで蹴り飛ばされたらしい。

俺は自分だけでは転がらず、葵を抱きこみながらビルの壁へと倒れ込む。ゴミ捨て場になっているポリバケツがガタガタと音を立てた。

「葵、まだ走れる？」

声にせずに聞く。しっかりと抱いたままなので、口は耳元にある。

「う…うん…っ」

震えるような返事の終わりで息を詰まらせ、葵は身を縮ませた。俺の横腹が衝撃に悲鳴を上げそうになるが、まだ耐えられる。容赦のない蹴りだが骨はいつてない。

「後ろのビルの間、ポリバケツの向こう側に走って。そしたら人通りあるから…っ」

ドゴツという音と痛みに歯を喰いしぼる。

軽く袋にしているつもりなんだろう。反撃すら俺はしていない。まだ、出来ない。

泣きそうに顔を歪ませている葵に、俺の携帯を握らせる。

「出たすぐ右の店。…都已達がいるから知らせて。分かんなかったら、おっさんに電話して隠れてて。必ず向かえに来てくれるから」

頭を蹴られて一瞬目の前が白くなる。くっそ、脳が揺れるだろうが。

まだだ。もう少し待ってろ。

葵に向かって笑って見せる。大丈夫、必ず逃がすから。

「絶対、後は追わせないから。行けるね？」

「ハルっ」

葵は首を振る。

俺達を囲む連中の輪は狭まってきている。野次る声も殺気立って来た。遊んでくれている内がチャンスなんだ。

「正直、俺一人なら逃げる自信あるんだ。だから、先に行って。少し足止めしたら、俺も逃げるから」

「…ハル」

「行って！」

突き飛ばすように葵をビル側に押しやる。

すぐ後ろにポリバケツ。ここへ座り込んだのは計算尽くだ。

ポリバケツを掻き分けて行く葵に駆け寄ろうとした男の横顔に右の拳を叩き込む。ああ、ストーカー男じゃん。

「一方的にやられてるだけだと思わないでくれる？」

振り返ってげっそりとしてしまった。六：七人いるじゃないか。

周囲に人はいない。近くの店が気付けば通報も期待出来るが、それは運任せだろう。

手近な男の鼻面に肘を喰らわせる。これで一人潰れた。

だが、残った連中を煽った事に間違いはないだろう。

飛び掛ってきた男の腕を避けながらそれを掴むと、力任せに足を跳ね上げる。転がった背中に膝を落とすが致命傷には程遠い。だが、もう次の手が伸びて来ている。

何度か顔や腹、背中に喰らった。息は上がってきているが、人数の割りにはダメージは少ない。勢いを流すように受けているので、まだ動ける。

だが、さすがに鉄の棒とナイフが目に入った瞬間、ヤバいと確信する。俺の手が届く範囲に得物はない。

ちらりと葵が行った方向に視線が向く。

都已達はいなかったか。って事は、おっさんが来るまでどこまで待てるか。

ゴクリと唾を飲むと鉄臭い血の味がする。武器を奪えそうな奴に目星を付けて、体の動きを頭で浮かべながら間合いを計る。

痺れを切らしたように動いたのは、向こうだった。

棒を掴んで持っていた奴の急所を蹴り飛ばす。棒を握り直して構える間もなく数回の衝撃は跳ね返した。

肩を抉るように切り付けられたおかげで左腕は既に上がらない。利き腕が残っている事に感謝する気にはなれない。左ばかり狙ってくるのが忌々しく、気を取られれば空いた側を切りつけられる。

蹴られる趣味はないので、切られるのを覚悟で反撃を繰り返す。

頭に振りかぶってきたバカを防いだところで、後ろから体当たりの衝撃を受けた。

肘でそいつの頭を払おうとして、違和感を感じた。

体中、痛みだらけで何処が何の痛みなのかは分からない。

一発喰らって膝をついたが、立ち上がりうとしてかけた力が空回りするのを感じる。

…ヤバい、深かったか？

顔を顰めて振り返ると、目も口大きく開けたまま顔を強張らせてる男の両手に握られたごついナイフが血まみれなのが見えた。

この野郎、抜きやがった。

止血を許してくれる程親切な連中じゃないのは分かってる。

力が抜けていく反面、ボコられている衝撃も遠ざかっていく。

ああ、本当にマズいな。これは。

霞む視界の中、頭に浮かんだのは。

…ごめん。

それが誰だったのか、誰に対しての言葉なのか考えられないまま、俺は意識を閉じた――。

13.

葵を狙ったのが響子が雇った男達だったという事は、翌日には分かった。

駆けつけたおっさんやその仲間が連中を全員警察に引き渡し、あの女も捕まったという。

俺は病院のベッドの中でそれを聞いた。
まったく女の嫉妬というのは恐ろしい。

自分よりいい仕事をし、大きな成功を手に入れそうな葵が妬ましかったと。

葵さえいなければ、という事らしい。

まあ、終わった事だから、細かい事には興味がなかった。

葵が無事だった事で、俺にとってのあの夜の事件は終わっている。

…俺は正当防衛という事になっているらしい。

「…もう、泣くなよ」

残念ながら、手を伸ばして慰める事は出来ない。片手は吊るされているし、もう片手を持ち上げるのが無理なのは実証済みだ。

俺は丸三日意識がなかったらしい。

目が覚めてからも検査をしては眠り、検査をしては眠り。

睡眠薬を盛られでもしたんじゃないかと思う程眠った。

骨折だの刺し傷だの打撲だの。眠る事以外やる事がない、と云うより出来る事がなかったんだけど。

付き添ってくれたのは和人だった。将人や父さんも来てくれたらしいけど、俺は眠っていたので会っていない。

ようやく検査の結果が一通り出て、外傷以外問題がないと分かった頃、和人が葵を連れて来てくれた。

何度か来ていたらしいが、やはり俺は眠っていたそうだと。

泣きじゃくる葵を置いて、和人はどこかへ消えた。

…気を利かせたのか？

有難いかは微妙なんだけど。

「ごめ…ごめんね。ごめんなさいっ」

もういい加減、聞いてもらえない。

葵の綺麗な顔は涙でぐしゃぐしゃだ。

「葵さん」

体を起こそうとするが、力は入らない。

和人がベッドの角度を調整して枕を背中に当てて置いてくれたおかげで、葵を下から見上げないでいられるのだけが救いだ。

肩を固定されているが指は動かす事が出来る左手を開いたり閉じたりすると、葵は俺の手を静かに握った。

「俺、誰かを守ろうとしたの、初めてだったんだ」

今まで、俺は守られているだけの子どもだった。

将人や和人に。父さんだって、守ろうとしたからこそ、俺を閉じ込めた。

世界が狭かった間、俺は自分が誰かを守るといふ事が出来る事すら知らなかった。

街に出て大事なものは増えていったが、それでもあんなに必死になった事なんてない。

「だからさ、ありがと。無事でいてくれて」

「ハルが無事じゃなきゃ意味ない。私のせいなのに」

「葵さんのせいじゃないでしょ」

出来るだけ、優しく笑って見せる。俺が少しも後悔していない事を伝えたくて。

「俺は生きてる。格好悪くばこぼにされたけど、傷なんか治るよ」

葵は唇を噛み締めて頷く。何度も。

「命懸けになるって、俺には必要だったんだ。俺の足りない所、氣付けたからさ」

「…何？」

俺は答えずに笑って見せる。

「命懸けって、本当に死にそうになる事じゃないって分かってるの？」

またボロボロと泣き出した葵の言葉に、確かにと苦笑が漏れる。

「葵さん、いつかまた、俺達楽しく暮らせると思うんだ」

唐突に言い出した俺の顔を、葵は窺うように見る。

ベッドに縛り付けられて、考える時間がたんまりとあったおかげでやっと見る事の出来た先の話だ。

「和人と雪乃さんに子どもが出来て、葵さんと透さんにだっていつかは出来るだろ？ そしたらさ」

葵の涙はいつの間にか止まっていた。

「きっと、そこは、すごく温かい…」

不思議だ。自分の事は何も浮かばなかったのに、四人が作る家庭は思い描く事が出来る。

『御堂』を出れば、そこには俺の居場所もあるんだろう。

和人はそのつもりでいるし、そうになったら俺はとても居心地がいい場所をまた手に入れる事が出来る。

…でも、それは、俺が本当に望む形じゃない。

「いつか、そこへ俺が行ったら、『おかえり』って云ってくれる？」

「おかえり…？」

「うん。『いらっしやい』じゃなくて『おかえり』」

温かいそこで、俺を待っていてくれるだろうか。たとえば、ずっとそこに居続けなくても。

「和人達だけじゃなく、葵さんや透さんにも云って欲しい。…贅沢かな」

今まで迫られていた選択では、自分が選べない事に気が付いていた。

俺は、『御堂遙人』も『ハル』も切り捨てる事なんて出来ない。

『御堂が役に立つ時が来るかもしれない。御堂に入る事が最善の

道になる子どもが出来るかもしれない。俺がいつか社長になるのは、そういう時の為でもあるんだ』

そう云った将人は、将人なりに同じ選択をしていたのだろうと思う。

過去、二者択一しか許してこなかった『御堂』の頂点に立ち、何かを変えるつもりだ。

和人が『御堂』を出れば、それ以降和人の子どももその子どもも『御堂』とは関係なくなる。だが、そうするつもりはないんだ。

父さんも『御堂』の風習には積極的ではない人だった。だが、将人はもっと積極的にそれを壊そうとしてる。

最初の一例さえ作ってしまえばいい。

俺達の代はこういう形だと、見せ付けてしまえば。

…それなら、俺が行くべき道は決まっている。

やっと、そこへたどり着いた。

「葵さんが女の子を産んだら、絶対可愛いよなあ。大きくなったらお嫁さんになるって言わせていい？」

にやりと笑うと、葵はやっと笑った。

潤みきった瞳は相変わらず強くて、それでもそれに沸き立つ感情は以前よりずっと穏やかなのを感じる。

「もっといい男になってたらね」

「…だってさ、透さん。いつかパパって呼んでも殴らないでよね」

俺が入り口に立ったままこちらを見ていた透さんに話を振ると、葵はびくりとしている。気付いていなかったらしい。

一緒にいた和人が近付いて来て、俺の前髪をかき上げるように頭

を撫でた。

「…よく決めたね」

「俺、実はすごく欲張りだったんだ」

しかも、我が侘だし。

呟くと、和人に頬を撫でられる。ガーゼは取れているがまだ腫れや色は元に戻っていない。ゆるゆると触れられる指は痛みを呼ばず、心地いい。

「いいんだ。それを許して、可能にする為に俺達がいるんだよ」

「父さんも許してくれるかな」

「明日将人が連れて来るって云っていたから、聞いてごらん」

頷くと、またやってくる眠気。

まだ相談したい事があるのに。

どうしても目を開けていられなくなった俺の頭を、和人はいつまでもゆっくりと撫でてくれていた。

14.

「――ごめんなさい」

目を伏せていった俺に、父さんは溜め息をついた。
枕元の椅子に座って俯き、片手に顔を埋めている。

「…寿命が縮んだ」

ぼそりと云われて、うっと詰まる。

そりゃそうだろう。屋敷を抜け出している事だってバラしたのは
そう前の事じゃない。

しかも、俺が閉じ込められていたのは、母さんの死がきっかけだ
った。病院のベッドに寝ている俺を見て、父さんがどれ位辛いかな
んて想像じゃ追いつかない。

「将人も和人も結構遊び歩いていたのは知っていたが、お前が最強
だ…」

――はい？

内容にも聞き返したいところだが、ボヤき？　ボヤきなのか？
ヘタすりゃまた閉じ込められるんじゃないかと思っていたんだけ
ど、父さんの様子が想像と違う。

「遙人。お前が寝ている間に、親父は悟りの境地に辿り着いたらし
いぞ」

くつくつと将人が笑っている。
悟りって、何を？

「過剰防衛を訴えられるくらい元気な息子だとは思っていなかった」

過剰防衛：まあ、最初に手を出したし何人かは伸したけど。でもあの状況で通用するのか、そんなもん。

「勿論、過剰になんてしない。『御堂』の弁護士は優秀でね。奴らにはしっかりと償ってもらおう。後悔つてものを噛み締めさせてやるからな」

はんと将人の鼻息は荒い。

ふっと表情が緩んで手が頭に伸びて来た。

「事情は聞いてる。頑張ったな」

「うん：でも、こんなになっちゃったから、あんまり上手くなかった。心配させてゴメン」

「お前の最大限だったんだろう？」

こくと頷く。

「ならいいさ。次はお前も無事でいる方法を考えろ。お前が傷つくと悲しむのは、俺達家族だけじゃない」

うん、そうだね。

大事だと思う人達が出来たし、思ってくれる人達も出来た。守るものが増えれば、俺はもっと強くなる。

喧嘩だろうが何だろうが、こんな無様な終わり方は二度としない。

その為にも云わなくてはならない事がある。

「俺、『御堂』でやって行きたい。将兄と一緒に、今ある大切なものとかこれから出来る大事なものを守って行きたい。父さんの片腕とは云わないけど…手くらいにはなりたい」

体は相変わらず動かない。枕に寄りかかったまま顔だけで二人を精一杯見る。

返事はすぐには来なくて、息が苦しくなる。

「…見捨てられても当然だと、覚悟していたんだけどな」

父さんは小さく笑った。

「今まで、すまなかった。私はお前までいなくなるのが怖かったんだ」

「俺はいなくなるらない」

「そうだね」

将人と和人は、お前を大切に育ててくれたんだね。そう云う父さんが、ずっと俺の目を見ている事に今更気が付いて動揺する。

泳いでしまった視線をそのまま逸らそうとしたら、顔を覗き込まれた。

「――ああ、やっぱり綺麗な瞳だ。メアリーが残してくれた宝物なんだよ、お前は」

記憶にない程優しく微笑まれて、ふいに目の奥が熱くなる。

傷に響かない程度の力で抱き締めてくれた父さんの体は筋肉で硬くて、将人と少し同じ感じがした。

俺がガキのように父さんの腕の中で泣くのを黙って見ていた将人

は、その涙が止まるのを見計らったように椅子を父さんの横に置いた。

「…まあ、そういう事で提案だ。遙人、お前日本を出ろ」

「――はい？」

表情がビジネス顔になっている。

って事は、『御堂』に入る条件…と云うより足掛かりみたいなものか。

「まずは学校と…高校と大学に行きながらツテで修行をさせてやる。今まで何もして来なかったお前のハンデは相当デカい。だが、ものにならない事は許さん。――いいですね？ 社長」

確かに、上に昇ると宣言したからには本格的に動き出すのは早いに越した事はない。

テキパキと喋る将人とは対照的に、父さんはにこにこ俺の目を見つめ続けている。…何か、俺は父さんをあまりよく知らなかったけれど、仕事でもこういうのか？ この二人。

「高校に入るまでは、イギリスでもいいかな」

「あー、あっちも相変わらずせっついて来てるんだよねえ。何ヶ月か世話になれば静かになるかも」

「あっち？」

問い返すと、父さんは苦々しく笑う。

「メアリーの实家。イギリスの富豪なんだけど、お前に会わせろって云われてるのずっと却下してるんだよね」

「はあ？」

声が裏返る。母さんの実家の話なんて初耳だ。
目を丸くしていると、俺達は何度か行ってる。と将人の溜め息混じりの声。

「だって、返して貰えなくなると嫌じゃないか」

こんなにメアリーに似てるんだからっとか力説されても。

何だこの可愛いおっさんは。こういう人だったのか？

あんぐりと口を開けた俺に、将人は更に溜め息をつく。

「遥人、昔の話は色々しただろう。基本的に、お前の父親はこんな感じだ」

そう云えば、会議続きで家族との時間が減ると拗ねたり文句を云ったり、たまに元気な母さんが兄貴達と出掛けると仕事を無理矢理遣り繰りして追いかけて行ったり、とか聞いた気がするな。

「修行は俺の友人で鍛えてくれるのが何人かいる。『御堂』傘下以後でスライド出来る事を考えて打診しておくが、アメリカカイギリスあたりだな」

何だか体が熱くなってくるのを感じる。

俺自身が答えを出した途端に、道が見えた気がして。

実際は体も動かないし、動くようになったとしてもまだ先は見えないのだけれど。

「さて、じゃあ早速連絡を取ってみる。まあお前は早く治す事だけを考えていろ」

ゆっくり出来るのは入院している間だけだからな。そう云って笑った将人は物凄く活き活きして見える。

なんだ、将人も喜んでくれているんだ。

「将兄、ありがと」

立ち上がった将人に云うと、奴はにやりと片目を瞑った。

「覚悟しておけよ。泣き言は聞かないからな」

そう云い残して、二人はとっくに面会時間が終わった病院から帰って行った。

15.

「ハル！」

がしりと背後からしがみつかれて、手からチケットとパスポートがばらばらと落ちる。

衝撃と首に回された腕はよく知っているものだったが、今この場所ですれが来るなんて思ってもみなかった。

搭乗の手続きを終えてラウンジに行こうかと和人と話していた。イギリスに向かう便までには随分時間がある。

早く着いたのは、和人の指定した時間が早かったせいだ。

…ここに現れられると、どうしても示し合わされた気がするんだけど。

「…和兄？」

抱きついて来た樹を受け止めながら、隣に立つ和人を見る。和やかに都已と裕也に手なんか挙げる前に、俺に何か云え。

「透を通して知り合った。駄目だよ、遥人。黙って行くのは友達に對してフェアじゃない」

そんな事云われたって、退院してから街に出る暇はなかった。よく考えたら、俺は連中の連絡先すら知らなかったんだ。

「後でここで会おう。将人や親父を拾っておくからゆっくりしておいで」

俺に一言も云わせないまま和とは歩いて行ってしまう。

：置いていかれた俺としては、気まずく黙っているしかない。

裕也がパスポートとチケットを拾う。都己がそれを覗き込んだ。

「御堂遥人、男。：十五歳ねえ」

ちらりと見られて、目を逸らしてしまう。

何を云われるのか、俺は覚悟が出来ていない。

「ばあか、情けない面すんな」

ペシッと頭を叩かれる。

「こんなもん見ても実感湧かないよな」

しげしげとパスポートを見て苦笑する裕也。

「俺は、黙って行こうとした事怒ってるからね」

腕にしがみついたまま頬を膨らます樹。

：なんだお前ら。もつと、何か云う事があるだろう。

「お詫びにハルの奢りでメシでも食うか。朝メシまだなんだよな」

都己の言葉に頷いた裕也が並んで歩き出し、樹が俺を引き摺る。

「ま…っ」

「あーうるさい。メシ食いながらいくらでも聞くから」

「先刻から都己の腹がうるさくて敵わない。メシが最優先だな」

何なんだ。

引き摺られながら、込み上げてくるのが何なのか、泣きたいのか笑いたいのか判断に困る。

取りあえず俺の奢りなのは決定らしいので、足だけはしっかりと動かす事にした。

「ハルが老けてるのって、ハーフってだけじゃないよね」

ハンバーガーに噛り付きながら失礼な事を云うのは樹だ。

「それだとハーフ全般に失礼だな」

「やりまくってたし」

「千人切りが出来そうな中学生って凄いやな」

テーブルにはこれでもかと積まれたハンバーガーとポテト。サラダまで付けてやったのに、奴らは好き勝手な事を云っている。

「…悪かったよ」

無然と云うと…いや、聞いてないな。

「大体水臭いよな。ボコられたって？ 云えよ、飛んでくっての」

「いつもの店にいないあんたらのせい」

「ああっ？ 俺らのせい？」

もう既に申し訳なかったと思う気持ちはかなり縮んでしまっている。

これだけ好き勝手云うという事は、開き直れって事だよな？

「…俺だってヤバいと思った時、早くお前らが来てくれないかと思っただけ」

舌打ち混じりに云うと、都已がにんまりと笑った。

「やっと素直になった」

「遅いよ」

何で揃って温い顔をするんだ。

…ひょっとして、俺、初めて云ったか？ 頼みにしたって事。

「ゴメンな。肝心な時に行けなくて」

裕也、それはなしだ。お前の一言は重い。

心の中で拒否してみても、動揺するのは止められない。

慣れていないんだ、勘弁して欲しい。

「…俺もゴメン。その、驚いただろ？ 色々」

観念した。その言葉は今の俺にぴったりかもしれない。
うな垂れた俺を、三人は嬉しそうに見ている。何でだ。

「驚いたけど、まあハルらしいって云うか」

「ハルはハルだし」

「だな」

待て。友情ってこういうものなのか？ 情けない事に、友達って
いうもの知らない俺は、この反応が友達だからなのか年上だから

なのか判断が出来ない。

相当情けない顔をしていたんだろう、三人が三人とも複雑そうな顔をしてこっちを見ている。

都已と樹に挟まれた裕也が二人に脇腹を突付かれているのが見えた。

裕也は溜め息をついて天井を見上げる。

云われる立場でごめん。裕也って、そういうポジションなんだ。

絶対改めてのくさい科白は裕也なんだ。

「和人くんから聞いてるから、お前からはその内思い出話としてでも聞ければいいと思ってる。：俺達は、年齢とか事情とかでお前と付き合ってきた訳じゃない。ただのハルを好きになったんだよ」

ほら。俺が泣きそんな事を平気で云うんだ。

俺は、無理矢理にと笑って見せた。

「帰って来た時に連絡するところ教えてよ」

いいシーンだと思ったのに、それに対する反応はまた激しかった。ふざけるなとか、わかってないとか、頭をぐしゃぐしゃにされる。何なんだよ、もう。

「帰って来るまでなんて、待てる訳ないだろうっ？」

樹が紙ナプキンを取って、「ペン」と手を出してくる。俺かよ。勢いに負けてボールペンを渡すと何やら書き込んだ。

「俺達だけじゃ不公平だろ。ハルも書け」

都己も書きながら、俺に紙ナプキンを寄こす。

「…ってか、赤外線通信とかあるだろ」

そう云いながらも、裕也も書き込む。

俺も新しい紙ナプキンに自分の番号とアドレス、イギリスでの住所を書いた。

改めてこんなものを交換するなんて、何だかおかしな気分だ。

不意に、樹に頭を抱えて引き寄せられた。

「俺達はさ、結構、ハルの完全無敵な味方だよ」

ぎゅっと力が込められる。本当、ストレートな奴。

「うん」

「待ってるよ、帰って来るの」

「…ヤバい。女だったら俺、樹に惚れてるかも」

俺は俺は？と云う都己の言葉で笑いが起きる。

腹を抱えて笑いながら、鼻の奥がツンとしてくるのを堪える。どうしよう。俺、こんなに幸せだ。

改めて、外に出てよかったと、今思う。

「待っててよ。すごいいい男になって帰って来るからさ」

目尻に涙を溜めながら云うと、三人は笑いながら俺の頭とか顔をぺちぺちと叩いた。

16.

「…おっさん、似合ってるねえ」

携帯で、そろそろ戻って来いと呼び出しがかかって待ち合わせた場所に三人と向かった俺は、和人に寄り添う雪乃さん、その隣の葵と透さん、父さんと将人、そしてもう一人。スーツを着たおっさんと対面していた。

思わず云ってしまったて口を自分の手で塞ぐ。スーツ姿で筋者のようになつたおっさん、目が怖いっての。

「お前…坊ちゃんって呼ぶぞ」

小声で云われる。何だ、それ。

「遥人。敏郎さん、一応うちの社員だから」

「はあああっ？」

将人の言葉に叫んだ俺を、誰が責められる？

おっさんは決まり悪そうに目を逸らしてるし。

「敏郎は私の昔馴染なんだ。籍は『御堂』にあるんだけど、…イレギュラー社員って云うのかな？」

父さんが照れるように云う。何で照れてるんだ。

「お屋敷でお会いた事もあるんですよ、坊ちゃん」

にっこり云うおっさんの口を、俺は両手で塞ぐ。

「…何か、すっげえ嫌」

「つれないですね、坊ちゃん」

「楽しんでるだろ、おっさん」

「勿論ですよ、坊ちゃん」

俺の手に塞がれたままもごもご云うおっさんは楽しそうだ。

それにしても『御堂』の社員？ マジか。

「これで私もお役御免ですかね？ 社長」

やけに晴々と父さんを見るおっさん。何だそれ。

「うーん。遥人のお目付けが終わってしまうとなるとねえ」

父さんにもここにこしている。

ちよつと待て。突っ込み所があり過ぎて、何から云えばいいのか分からない。

お役御免？ お目付け？ 何で晴れ晴れしく云ってんの？

「遥人遥人」

俺が口をパクパクしているのに気付いてか、将人が手招きをする。

「お前で三人目なんだよ。敏郎さんの店に入り浸るの」

「…将兄も？」

「そ。勿論和人も」

「親父が息子を野放しにする訳ないだろ？ 子煩悩大爆発な人なんだ。かと云ってウチの環境じゃあストレスを発散させない事には、万が一道を踏み外しては元も子もない。…あとは、まあ、社会勉強

の為？」

…最後のは、付けたしだろう。どう聞いても。

「で、『bear's bar』を敏郎さんに預けて俺達の様子を報告させたり、問題が起きないように色々手を回させていたんだ。まあ、お前の場合、前半は俺の独断だったけどな」

「もしかして『bear's bar』って」

「親父の持ち物だよ」

見事に手の平で遊んでいたのか。それにしても、普通の親がする事じゃない。…いや、十分に普通じゃないのは分かってるんだけど。

「おっさんって、何者なわけ？ お目付け役だったのは置いておくとして」

「親父のボディガードみたいなものかなあ。親父も昔屋敷を抜け出してた時に知り合ったらしい。色々顔が利くから雇ったって話だ」

親父も同じ経験をしていたのか。そりゃあ、俺達の、というか俺の放蕩っぷりも止めないか。

「…ちょっと待て、お役御免って」

和やかに話しているオヤジ二人が一緒にこっちを見る。

「そろそろ私の所に戻って来てもらわないとねえ。こう見えて敏郎は優秀なんだよ。いないと不便でね」

「…いると便利なんですネ、私」

「うん」

とほほ、と云うおっさんに父さんは明るく笑っている。ちょっと気の毒だな。

「じゃあ『bear's bar』は」

「人に任せてもいいし、売ってもいいし…」

「や、待って。いや…うん」

口をついて出るのは文章になっていない言葉。

今、何を云おうとしたか自分で気付いて焦る。焦ったが、これは譲りたくない。

「あの店、人に売るのが待って。…俺が買う。すぐには無理だけど」

あそこを失くしたくない。俺はあの店がある街で色んな物を手に入れた。

感傷と云うなら云ってくれ。

「…そこは、くれて強請るとこなんじゃないの」

「あー、強請られたらあげちゃうねえ、確かに」

和人と父さんが頷いている。貰ってどうする。

「遥人におねだりされた事ないからなあ」

「店丸ごと強請る子どもなんていないだろ」

云った俺は、そこにいる全員の視線を受けて怯む。…何だ？
ポン、と都已が俺の肩に手を乗せた。

「お前…擦れてないのな、本当に」

「自分がどれだけ金持ちのお坊ちゃまなのか、自覚はないのか」

「：いつも着てる服が幾らとか、知らない筈だわ」

裕也と葵まで。：いや、家が金持ちでもあんまり関係ないだろう。恩恵を受けていた自覚はある。

気がつくとも財布の中は補充されていたし、その額が人と桁が違う事も知っていた。だからって、飲み代とかホテル代くらいしか使い道はなかったし、無茶な使い方をする気になった事もないから実感は薄い。

「困った坊ちゃんだ」

「坊ちゃん云うなっ」

「じゃあ、こうしようか」

おっさんに食ってかかった俺は、その勢いを父さんの能天気な声に吸い取られるように固まる。

何か、もう学習したぞ。父さんのこの能天気な、いい事思いついた的な口調。これはまたとんでもない提案をする時だ。

「イギリスでは語学準備としておくとして、その後四年で学業を修了しなさい。その間にニックやテッドの所で学んで、卒業後はそうだな：五年以内に重役席に座る事。その条件を呑むなら破格で譲ってあげよう」

破格って、その条件で更に金まで取るのかよ！：と云う突っ込みは飲み込んだ。

待て。四年で高校と大学出て五年後って事は俺は幾つだ。二十四歳って、将人並みじゃねえかつ

今まで、『御堂』でだって将人以外に聞いた事ねえぞっ

「温いですね」

将人が平然と云う。和人はやれやれって顔だし、他の奴らはさすがに唾然としている。

父さんとおっさんは…だから、何でにこやかなんだよ。

「勿論最大限待って、の話だよ。まさか全部の期間を使うなんて思っていないからね」

「おいっ」

思わず上げた俺の声は、見事にスルーされる。

「大丈夫。日本と違って四年で大学まで終わらせるのなんて、簡単だよ」

嘘つけっ

世の中の学生や受験生の皆さんに謝れっ

「それ位出来なきゃ、私の片腕にはなれないよ」

冷ややかな父さんの顔。これが本当の社長の面か。…実は物凄く性格悪くないか？

俺は精一杯顔を上げて父さんと将人を見る。

そこまで云われて退けるか。

「必ずやってみせる。約束忘れるなよっ」

畜生、イギリスでだって時間を無駄にして堪るか。アメリカからだってとっとと帰って来てやるっ

鼻息を荒くしたが、時計に気付いて我に返る。もう行かなきゃ。

雪乃さんと葵に声をかけ、都已や裕也、樹に近寄る。三人とも待ってるぞと云ってくれる。俺も強く頷いて見せた。

おっさんと父さんとは握手を交わす。

父さんは頬に挨拶をくれ、「頑張っておいで」と云ってくれた。

そして和人と将人は、二人とも静かな柔らかい笑みで強く抱き締めてくれる。

：ああ、これが最後の子ども扱いなんだろう。そんな気がして俺も抱き締め返す。

頬に挨拶をくれる時、二人は示し合わせた訳でもないだろうに、小声で同じ言葉を呟いた。

「Strong luck to our angel」(私達の天使に強運を)

まじないのようなその言葉に、何だか心が温かくなる。

俺は皆を振り返り、全開の笑顔に向けた。

「行って来ます！」

三ヶ月イギリスの母さんの実家で過ごした俺は、まだ居ろという祖父母を振り切ってアメリカへと渡った。

そこで待っていたのは、自称将人の親友ニコラスとセオドアとの生活だった。

と云っても、二人の会社持ちのアパートに住まわせてもらっての一人暮らしだったが。

二人は一緒に『B & a m p ; R』という会社を経営していた。将人の友人だけあって仕事中毒かと思う程のやり手らしく、俺は学校に通う傍ら奴らに扱き使いまくられた。

本社は十一階建ての自社ビルを持っているくせに、二人は通りを四つほど離れたアパートに子会社を持っていてそこを執務室代わりにしていたので、実質そこが首脳部となっていた。（そこに俺が住みついたんだけど）

おかげで電話やメールで済まない用件は俺が走る事となり…いい加減ムカついたので、この際会社全員に顔売ってやるとメールボーイのバイトとして雇えと提案した。社内便の配達ってやつだ。勿論、色々な部署を覗ける事を狙って。

一ヶ月経たないうちに百人は軽く超す社員全員と親しく会話するようになった俺の背中を、ニコラス——ニックは上機嫌でバシバシ叩いていた。

スキップを大活用して高校課程を終えた俺は、大学に通う頃には

二人の会社で色々な企画に携わるようになっていた。

最初は案を会話のついでのように聞かれた。それが企画書を出せと云われるようになり、企画会議に出ると云われ、その内、企画を必ず成功させろと檄を飛ばされるようになった。

まんまと二人に乘せられたのかもしれない。最初からこのつもりだったのか。

気がつけば、俺は『B & a m p ; R』の社長達の秘蔵っ子として社外でも名前が通用するようになっていた。

ニックは大柄で豪快に笑う陽気な男だ。怒鳴るとライオンみたい
に迫力があるが、涙もろい。ぶっとい腕で人をバシバシ叩きながら
にこにこと笑う。

セオドア―テッドは逆にクール。澄ましていると云うより、い
つもニックを見守っている感じがした。

勿論二人は喧嘩だってする。その時ばかりは爆発したテッドを前
にニックがおろおろしたりして。最初見た時はびっくりしたが、じ
き慣れた。二人がお互いの事を大切に思っているのは見ていれば分
かったので、犬も食わないってやつだと構わない事にした。…阿呆
らしくて。

二人には仕事は勿論プライベートでも色々と教えられた。それこ
そ、酒の飲み方から女の扱い方まで。

俺が程ほど遊んでいる事に二人とも驚いていたが、「じゃあ、上
級編だ」と云いだしたのには笑った。あ、全部「将人には内緒な」
とウインク付きだったが。

二人ともよくモテたが、俺としてはテッドのスマートさを盗みた
いところだ。プライベートでのテッドは妙な色気があって格好がい
い。上質な男っていうのはこれかと思った。

…ニックのキャラには、俺はなれないと云うのが本音だったが。

毎日が忙しくて楽しくて。

だから、大学の卒業をもぎ取る二年間なんてあつと云う間だった。親父との約束通り四年で学業は修了させた。御堂の頭脳バンザイだ。

これからの身の振り方を考えた頃、このまま『B & a m p , R』に居ろという提案がニックから出た。

来るとは思っていた。俺も随分と愛着を持ってしまうている。

だが、俺は『御堂』で生きると決めていた。

俺の気持ちが揺るがない事は分かっていたらしい。二人ともやっぱりな、と笑って許してくれた。

将人から帰国命令が来たのはそんな頃だ。

まだ完全な帰国じゃない。俺はまだ日本には帰れないらしい。

なぜなら。

「アメリカ支社？」

裕也が煙草に火を点けながら、目だけで続きを促している。

「もうすぐ立ち上がるんだ。そこに入社する。日本だとしてもペーペーからのスタートだから、どこでも一緒なんだけどな」

アメリカに初めて支社を置く。新入社員として入るにも関わらず、俺にはある程度の地位が用意されているらしい。底辺からの始まり

かと思っていたが、『御堂傘下にスライドする』と将人が云っていたのはこういう事らしい。：確かに、『B & a m p ; R』で既に俺は平社員ではなかった。

「でも有利なんじゃねえ？ 業界、顔だろ？」

「多分そこが狙いだろ。俺にも有利だけど『御堂』にだって益はある。ま、伊達に顔売りまくってた訳じゃないから」

ニックとテッドは大抵の場に俺を連れて行ってくれた。『御堂』という名はアメリカでも知られてはいたが、『B & a m p ; R』の不利にならない程度にしっかりとアピールして来た。まあ、業種が完全には被らないので、提携する事はあっても敵対はしない関係だから出来たんだが。

：親父と将人の思惑にしっかりと乗ってしまった結果だろう。奴らは『御堂』のアメリカ進出に関して、このタイミングを狙っていたに違いない。

「にしても、五年間本当に帰って来なかったよね」

薄情だよなあと樹にしみじみと云われて苦笑してしまう。

メールや電話で連絡は取り合っていたが、結局一度も日本には帰って来なかった。そんな暇すら惜しかった。

「だーから、帰って来てすぐに会いに来ただろ」

時差ぼけ防止の為に、日本に着いてすぐ『b e a r ' s b a r』に来た。

先月仕事でアメリカに来ていた都己には云ってあったので、三人とも集ってくれたと云う訳だ。

ちなみに、カウンターの中では、おっさんがやにやこちらを見ている。普段店は人を雇っているらしいが、俺がこっちにいる間はおっさんは親父から離れて店に出る事にしたらしい。聞いた話だと、ちよくちよく店に出ているらしく、未だ『bear's bar』の顔はおっさんらしい。

五年はさすがに長かった。

樹は高校から付き合っていたという彼女と結婚したし、裕也は自分の店を持って順調にやっている。都己の名前は向こうでも聞く事があった。日本だけで納まるつもりはないらしい。

「年くったよなー」

何となく呟くと、ぼこぼこ拳や蹴りが飛んでくる。

「お前が云うな」

「だって、お前ら三十路？ 見た目変わんねえけど」

「ハルは二十歳かあ。やっと年齢が追いついて来たって感じ？」

「いや、老けたろ」

「：せめて、男っぽくなったとか、逞しくなったとか云ってくれない？」

老けたはないだろう。元々老けてたんだ、どうせ。

「うーん、ごつごつしてきた？」

「前は柔らかくて美味そうだったのにな」

全然フォローになってねえよとぼやくと三人とも本当だし、としれっとしている。

ジム通いは必須だったんだよ。ニックとテッドはどんなに忙しく

てもジム通いと毎日のジョギングは欠かさなかった。将人の謎の筋肉もこれに違いない。勿論毎日付き合わされた。おかげで体脂肪率は激減、筋肉はしっかり付くし、顔まで贅肉が落ちて、僅かな休暇を過ごしに母さんの実家に行く毎に悲鳴を上げられてきたんだ。母さんの面影が薄れてしまったのが、相当ショックだったらしい。

「ハルー!? 何その顔っ」

そうそう、正にこんな反応だったぞ、ばあさん。

その声に反応する前に、両頬を手で挟まれて横を向かせられる。目の前には五年前と変わらない顔があった。

「…葵さん、いきなりそれはないでしょ」

「いやあっ 男臭くなっちゃって、年月って何て残酷なのっ」

隣で都己が爆笑している。樹と裕也：おっさんまで肩を揺らしている。我慢する位なら笑えよっ

「…葵さん? 怒ってる?」

「なーんにも。音信不通にされても、カズから色々聞いてたし」

「怒ってるじゃないか」

「全然」

「結婚祝いと出産祝い、届いた?」

「うん、カズが届けてくれた」

「クリスマスプレゼントは?」

「うん、ありがと」

「自分で行けなくてごめん」

「ううん」

「約束、覚えてくれてる?」

俺の頬を挟み込んだままの葵の手首をやんわりと掴む。

顔を覗きこむと、葵は相変わらず綺麗な顔がくしゃっと歪んだ。

俺の手を弾き飛ばす勢いで首にしがみつくと、ぎゅうっと力が込められる。

「おかえりーっ 頑張ったねえっ」

何故泣く。葵を抱きとめながら、周りから送られてくるにやにや笑いに苦笑する。

ま、今日くらいは許してもらえようだろう。

「子どもを産んでから、涙脆さが増したんだよね、葵は」

：いたんですか。いたんですね。

透さんは、以前と変わらない綿菓子のような笑顔を浮かべている。
：怖いんですけど。

「透さん、お久しぶり。：葵さん、ダンナの前で他の男に抱きついてますが」

「姉弟の抱擁だと思って許す。おかえり」

姉弟ね。笑いが漏れた俺に、透さんは柔らかく笑う。

約束の事を聞いているんだろう。そう思ったら、じわっと胸の辺りが温かくなる。

「ただいま：双子のパパになって、どう？」

和人と雪乃さんに遅れる事二年。葵は女の双子を出産した。

勿論飛んで帰ったかったが行動には移さず、出産祝いやクリスマスの子どもへのプレゼントは和人に託した。

自分へのけじめだと思って直接連絡はしなかった。

帰って来たら「いらっしゃい」ではなく「おかえり」と云ってくれ。それは篠原家と他人以上の関わりをずっと持ちたいと願った俺の我が侘だったから。

「面白いよ。ああ、葵にそっくりだから期待してよね」

「ツバつけていい？」

「それは却下」

睨まれてくくつと笑うと、透さんはにやりと笑う。

「いや、もうハルおじさんの出る幕はないかもね」

「何それ」

「おじさんかよ。」

「大地がもう、べったりだから」

「…和人んところ、四歳だっけ」

和人の子どもは大地と名付けられた。見た目はそうでもないが、性格は今のところ和人似らしい。

「会ったかい？」

「いや、明日行く予定。由布と真由にも会わせてよ。楽しみにしてたんだ」

何と和人は葵と透さんの隣に家を建てた。どうも、透さんが家を建てようとしていた時に『御堂』の管理していた二軒分の土地を将人がキープしたらしい。

結婚祝いにしたって甘いだろうと笑ったら、また喧嘩した挙句に

ローンは自分で組むと云う事で決着したと云う。と云っても、将人の事だ。破格にしたんだろうけど。

将人にしたら、雪乃さんへの気遣いなんだろう。

和人は大学の調査隊で家を留守にする事が多い。残される雪乃さんにとっては隣に葵達がいる事が心強いに違いない。

「…知ってるかい？」

透さんがにやりと笑う。

「和人の家、まだ使っていない部屋が一つ取ってあるんだ」

手が止まる。それが何の為の部屋かなんて分かり易すぎて。

「家具買いに行かなきゃね」

葵が唇に人差し指を当てて、聞かなかった事にしてね、と云う。

「ただいまって云うんだろ？」

ここに来て、まだ和人は俺に新しいものをくれようとする。

込み上げてくるものは、瞬きをして抑えた。代わりに口許が緩む。

『御堂』で生きるけれど、『御堂』だけでは生きない。

将人が与えてくれたものも、和人が与えてくれたものも、どちらもなかった事にはしない。

将人や親父と生きる。でも、和人とも生きる。

俺の望んだ生き方は、将人と和人、そして親父にまだ擁護されて

いる。

これに報いる為に、今俺が出来る事は唯ひとつだ。なだ、スター
トラインにすら辿り着いていない俺が出来る事。

「透さん、俺必ず親父の条件クリアするから」

将人がそうしたように。

そして、温かいものを沢山くれた人達と生きて行く。
ほんの八年前、俺の世界は将人と和人だけだった。
でも今は違う。

『bear's bar』の店内をゆっくりと見回す。

見慣れた店内は変わりがなくて、カウンターのあっさんも相変わ
らずだ。

いつの間にか、ここにも大切なものが増えた。

友達が出来て、家族が増えて、俺はどんどん人間になっていく。

空になったグラスが持ち上げられ、見上げるとおっさんと目が合
った。

「おっさん、待ってろよ。もうすぐ楽させてやる」

「後五年か？」

「そんなに待たせないって」

にやりと笑うと、少しも変わらないデカイ手で髪をぐしゃぐしゃ
とかき回される。

こうする時の嬉しそうな顔も変わらない。

ずっとこの表情の意味が分からなかった。

今は分かる。

この人は、俺が自由を知らなかった頃を知っている。俺が人間らしくなっていくのを見守ってくれていた人だ。

その顔に向かって、周りにいる皆に向かって、ここにはいない大切な人達に向かって俺は胸を張る。

必ずスタートラインに着くから、まだ、見守っていてくれる事を願って。

見守った事を後悔させない事を、心に決めて。

エピソード

晴れ渡る青空の下、男は車から降りると忌々しげに空を見上げる。
殺人的な日差しに細められた瞳は、青碧色。

「今日はもう予定は入ってませんから、ごゆっくり」

運転席から降りた秘書を軽く睨む。

「ってか、日曜くらいゆっくりさせろよ。朝イチの会議なんて何の
バツゲームだよ」

「はいはい。皆さんお待ちかねですよ。怖い顔してないで早く行っ
たらどうです」

あしろのような言葉に舌打ちすると、男は後ろに撫で付けていた
蜂蜜色の髪を片手でかき回す。

「お前も寄ってけ、佐久間。もう仕事は終わりだ」

「ああ。チビ達に会うのも久し振りだ」

プライベートだと明言されて、秘書は口調を砕く。二人は肩を並
べて歩き出した。

「ハル兄！ お帰りなさい！」

リビングからウッドテラスを覗くと、いち早く気がついた少女が
大きく手を振って駆け寄って来る。

白い肌に黒い髪、大きな黒瞳の少女を彼は抱き上げる。

「いい子にしてたか？ 由布」

「うん！」

ベンチには兄と義姉、そして兄と姉に等しい友人が座っていて、その中心には生まれて間もない赤ん坊を抱いた父の姿もあった。

「あれ、将兄戻ってない？ 一緒に会社出たんだけど」

「着替えてるよ。ほら」

兄に示されて振り返ると、腕に自分の腕の中の少女と瓜二つの少女を抱え、反対の手で少年の肩を抱いた長兄が歩いて来るところだった。

「あのね、由布はハル兄を待ってたの」

耳元で囁かれてその顔を見ると、じっと見つめてくる瞳は母譲りで強い。

微笑んでから少女を下ろすと、待っていたように少年がその手を取って外へと駆け出そうとする。少女はもう一人の少女を呼び、一緒に少年の後を追った。

芝生で駆け回る子ども達を、大人は微笑みながら見守る。

ふと、昔夢に見た情景と重なり、彼の口許が綻ぶ。

それは、温かい、温かい、幸せの象徴―――。

エピローグ（後書き）

お付き合いありがとうございました。

シリーズにしていけたらと思っていますので、また読んで頂けると嬉しいです。

※18歳以上の方、既に「ムーンライトノベルズ」で同シリーズが2話完結しておりますので、そちらも宜しく願います。

18歳未満の方は申し訳ありません。また読んで頂ける話も書きたいと思っていますので、その時は宜しく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3655h/>

very lucky angel（R15ver.）

2010年10月20日23時06分発行